



NEWS LETTER

拠点主催企画レポート

演劇映像学連携研究拠点

February 2013

Number. 3

日仏共同国際シンポジウム 「演劇と演劇性」

2012年10月30日(火)、10月31日(水)、11月1日(木)の3日間にわたって、日仏共同国際シンポジウムが開催された。当国際シンポジウムは、早稲田大学とストラスブール大学、アルザス・欧州日本学研究所との提携により、2005年度から定期的に開催され、今年度で4回目を数える。今回は、早稲田大学小野記念講堂を会場に、フランスより8人の研究者を招請して、講演と討論をおこなった。シンポジウムのテーマは「演劇と演劇性」。演劇の本質、演劇が演劇たりうる条件を指し示す概念であるとともに、「演劇的である(が、演劇そのものではない)」ものとして、演劇の周縁を表しもする不思議な概念である「演劇性」(théâtralité)について、異なる背景の、異なる時代・地域の、異なるテーマ(狭義の演劇に限られない)を対象とする研究者が一堂に会し、多角的に検討することによって、より立体的に演劇(的)なるものの本質を浮かび上がらせることができるのではないか、と企図されたものである。

1日目は、「演劇と台本」というテーマのもと、4つの講演とパネル討論がおこなわれた。竹本幹夫氏(拠点代表・演劇博物館館長)による「世阿弥自筆能本をめぐる諸問題—謡本との断絶を中心に—」では、謡本に基づく復元本文が、なぜ世阿弥時代の能本と完全に一致しないのかにつき、作品ごとに相互の異文の実態を検討しながら分析が加えられ、世阿弥時代の能の台本と後代の謡本との、基本的な性格の相違が明らかにされた。また、児玉竜一氏(早稲田大学)「戯曲を刊行するのか、しないのか、それが問題だ——歌舞伎の事例を出発点として」では、戯曲を公刊し、定本化を推進するジャンルである能や人形浄瑠璃(文楽)に対して、戯曲(台本)を公刊しないのが常である狂言や歌舞伎、俄、さらに落語や講談、漫才といった舌耕芸、そこには

同時代性への執着、即興性への親近、定本化の拒否、演者の個人芸への接近といった諸要素が推察され、それによってジャンルの本質までが規定されているのではないかと、との興味深い問題提起がなされた。ダルウィン・スミス氏(フランス国立科学研究センター)による「フランスの演劇伝統における書かれたものの位置(13世紀から16世紀まで)」では、演劇作品の写本におけるテキストの変容や符号の解釈が提起する諸問題について、『ロバートとマリオン』、『ビエール・パトラン先生』、『聖ルイの劇』そして『三聖人の聖史劇』から具体例を引きつつ考察が加えられ、黒岩卓氏(東北大学)「中世演劇テキストの写本とその使用—アルヌール・グレバン作『受難の聖史劇』H写本(Paris, BnF, fr. 1550)の例—」では、15世紀の演劇テキストの伝承・上演において、書かれたドキュメントがいかに成立し使用されたのか、そのあり様の一例が示された。さらに、発表者4人によるパネル討論では、舞台上にしか存在しない、消えることを宿命づけられた演劇という形式、なかでも古典演劇について、どのような資料を用いて、どのようにアプローチしてゆかが重要であるとの共通認識のもと、読書用の台本と上演用の台本、テキストの伝承過程と台本の流動性、著者・役者・書店(印刷業者)の関係性、韻文と散文あるいは音楽と詞章などの問題について議論が交わされた。また会場からは、能狂言の形成過程や、日本とフランスそれぞれにおける著者の地位、中世フランス語テキストや日本の古典芸能テキストにおけるト書の位置等について、活発な質疑応答がおこなわれた。

2日目の、近藤弘子氏(早稲田大学大学院博士課程)「説話と能」では、能「求塚」の地獄描写を中心に、典拠となった説話テキストの表現が、能の演技上は、どのように立体的に表現されるのかが考察さ

contents

- 日仏共同国際シンポジウム「演劇と演劇性」1～3 p
 - 日本演劇学会 秋の研究集会「災害と演劇」 3 p
 - 「翻訳プロジェクト」公開原稿一覧 4 p
 - 1938年問題研究会 5 p
 - 平成23-24(2011-12)年度テーマ研究成果報告 6～13 p
 - 平成23(2011)年度公募研究成果報告 14～19 p
 - 平成24(2012)年度公募研究成果報告 19～24 p
 - 予告・お知らせ 24 p
- 公募研究について



左から児玉竜一氏、竹本幹夫氏、ダルウィン・スミス氏、黒岩卓氏



竹本幹夫氏



ダルウィン・スミス氏



サカエ・ムラカミ＝ジルー氏

れ、金昭賢氏（早稲田大学大学院博士課程）「日本の近世演劇における韓国—朝鮮通信使を題材とする人形浄瑠璃作品を中心に—」では、日本の古典戯曲において、韓国（三韓・高麗・朝鮮など）を扱った作品、とくに18世紀の人形浄瑠璃作品を主な対象として、日本の近世演劇における韓国像が検討され、朝鮮通信使のもつ演劇性は日本の近世演劇における韓国像の形成に多大な影響を及ぼしたと結論された。サカエ・ムラカミ＝ジルー氏（ストラスブール大学）による「能と歌舞伎における女性の役に見られる演劇性：秘伝をめぐる」では、能と歌舞伎の象徴的な女性の役を中心テーマに、師から弟子へと秘伝として継承される幽玄の演劇性について、世阿弥元清と芳澤あやめの演劇理論に典拠しつつ論じられた。アントナン・ベシュレル氏（ストラスブール大学）「大江健三郎、あるいは犠牲の演劇」では、評論では原爆や戦争への批判、憲法第9条の擁護などが常に論じられてきたにもかかわらず、小説では暴力性へのあいまいな憧憬が重要な課題であり続けた大江健三郎の諸作品について、フィクションにおける犠牲の演劇の形態と意味が論究された。奥香織氏（早稲田大学）「マリヴォーにおける『露呈』の演劇性」では、偽装が複層的に展開される作品（『贗の侍女』、『愛の勝利』）を中心に、マリヴォー劇が内包する『露呈』の演劇性について検討され、間瀬幸江氏（早稲田大学）「テキストと挿絵の対話関係—小説『ペラ』の場合—」では、エルミヌ・ダヴィッドの挿絵が、ジロドゥの小説の文体がもつバプチンの意味での「対話関係」性を、挿絵の形で「翻訳」するのに成功していることを、テキストとの相関関係の分析から明らかにした。サンドラ・シャル氏（ストラスブール大学）『『モダン日本』における都市のドラマテュルギーと女性の演劇性—銀座とモダン・ガールをめぐる—』では、吉見俊哉の上演論的パースペクティヴという視座を踏まえつつ、第2次世界大戦以前のモダニズムとしての都市のドラマテュルギーと女性の「テアトラリテ」（演劇性）を詳らかにすることを目的として、関東大震災後の銀座という盛り場のなかで発揮されたモダン・ガールの「テアトラリテ」の諸相が考察された。カロール・エゲル氏（ストラスブール大学）による「時代に試される演劇性」では、演劇性とは、動的であって多かれ少なかれ捉え難い概念として提示されるものであり、それは、演劇創造がなされる文化的なコンテクストによって、そして変化（これは文化的であ

るだけでなく心理歴史的でもある）に応じてこのコンテクストから帰納される世界との特定の関係によって条件づけられているからであり、演劇性概念が最も自由に概念の複層性を垣間見せるのは、まさしくこの柔軟な変動性においてなのである、と結論された。

3日目の、イリニ・ツアマドゥ＝ジャコベルジェ氏（ストラスブール大学）による「ギリシャ起源の言葉を通してみる演劇性概念」では、「ミメシス／模倣」（mimesis/imitation）、「劇場＝演劇」（théâtre）、「ドラマ」（drame）、「俳優＝偽善者」（hypocrite）といったギリシャ語の演劇用語が、「演劇性」概念の持つ意味論的かつ共示的な複雑さを明らかにできるかどうかを検討され、イザベル・レック氏（ストラスブール大学）「演劇性と喪の儀式（ガリシア州演劇）」では、フランコ独裁時代のガリシア州のアイデンティティ演劇はどのような「演劇性」を持ちうるかとの問題関心のもと、喪の儀式性が、ガリシアの独自性に固有の演劇性を探し求めているR. ヴィダル・ボラノ、E. ルイバル、F. タクセスといったアブレンテ世代の作家たちに素材を提供し、それは、たいていカーニバルという素材、すなわちこのスペイン北西地方において特に強く根づいていたもうひとつの民衆的な儀式性と結びついている、と考察された。藤井慎太郎氏（早稲田大学）による「カタストロフィと演劇性」では、しばしば「劇的」、「悲劇的」と演劇的な語彙によって形容された大震災について、カタストロフィと演劇が歴史的に結んできた重層的な関係に着目しつつ、現代の芸術家は、大震災というカタストロフィに対していかなる反応を見せているのか、舞台上では表象不可能と見なされるこの対象にいかんして接近を試みているのか、こうしたカタストロフィは結局のところ演劇に何をもたらしたのか、という2011年3月11日の東日本大震災以来、発表者が続けてきた思索についての現状における一報告がなされた。ジョゼット・フェラル氏（パリ第3大学）による「演劇的なものとパフォーマンス的（パフォーマティヴ）なもの、その間で」では、演劇の舞台実践が、舞台上において現実的なものとますます戯れるようになった今日、演劇性という概念の持つ多様な意味合いが簡潔に類型化されるとともに、演劇性の基盤が問い直され、そのような極限の例においては、演劇性は猥褻（obscène）に陥るものとして、消え去ることを求められているのではないだろうか、との見解が示された。また、鴻英良氏（演劇



ジョゼット・フェラル氏



鴻英良氏



藤井慎太郎氏

批評家)による「演劇性とその脱イデオロギー化作用をめぐる」では、少なくとも日本の現代劇においては長らく忘却されていた演劇における演劇性と政治性の結びつきに関する問題について、ささやかながら、こうした争点に肉薄しようとつとめてきた日本の集団の幾つかに触れつつ、演劇性の脱イデオロギー化作用の日本における問題が論じられた。

3日間ともに多くの来場者に恵まれ、シンポジウムは盛会のうちに

幕を閉じた。「演劇性」(théâtralité)についてさまざまな角度から活発な議論が交わされ、予定時間を大きく超過するほどであった。なお、本シンポジウムの開催にあたってご尽力いただいたアルザス・欧州日本学研究所事務局の皆様、また流麗な通訳を披露してくださった福岡裕子氏、高野勢子氏に末筆ながらこの場を借りて御礼申し上げる。

(宮信明)

拠点主催企画レポート

日本演劇学会 秋の研究集会「災害と演劇」

日本演劇学会が毎年秋季に開催している「秋の研究集会」の企画・運営を連携研究拠点が引き受けることになり、2011年12月3日(土)・4日(日)の両日にわたって、早稲田大学早稲田キャンパスを舞台に、秋葉裕一演劇博物館副館長(当時)を実行委員長として、研究集会が開催された。大会テーマは「災害と演劇」。地震・津波はいうまでもなく、戦争やテロリズムにいたるまで、より広い視野から「災害」について考察するために企画されたものである。大会プログラムは以下の通り。

【1日目】

■開会あいさつ 天野文雄(日本演劇学会会長)

■企画シンポジウム

「ヨーロッパ19世紀末転換期演劇論

——演劇映像学連携研究拠点『翻訳プロジェクト』をめぐる」

〈司会〉秋葉裕一(早稲田大学)

〈パネリスト〉谷川道子(東京外国語大学名誉教授)、鴻英良(演劇批評家)、内野儀(東京大学)、藤井慎太郎(早稲田大学)

■演劇博物館ツアー

■講演「震災と演劇 ～芸術文化環境からのアプローチ～」

〈講演者〉伊藤裕夫(早稲田大学演劇博物館GCOE客員講師)

〈司会〉秋葉裕一(早稲田大学)

■懇親会

【2日目】

■研究発表I-A(古典芸能)

〈司会〉今岡謙太郎(武蔵野美術大学)

○「閉塞状況における徹底的傾聴の意義——能『井筒』における僧侶の祈りに触発される人生転換を手がかりにして」

阿部伸麻呂(上智大学)

○「太閤記物人形浄瑠璃作品に表われた謀叛——「絵本太功記」を中心に」

原田真澄(早稲田大学演劇博物館GCOE研究助手)

○「明治三陸地震津波と演劇」

日置貴之(東京大学大学院博士課程)

■研究発表I-B(近現代／ヨーロッパ)

〈司会〉市川明(大阪大学)

○「H.v. クライストにおけるカストロフィと秩序」

林立騎(早稲田大学演劇博物館GCOE研究生)

○「オニール劇における反戦へのメッセージ」

伊藤佳世子(京都大学)

○「マルターラーの音楽劇における哀悼——異化による批判と笑いを併せ持つ哀悼劇」

高橋慎也(中央大学)

■研究発表II(現代／日本)

〈司会〉中島裕昭(東京学芸大学)

○「危機の時代の太田省吾」 西堂行人(近畿大学)

○「国民投票プロジェクト(Port B)——震災後、演劇に何ができるか」

マルタン・ジャン＝フィリップ(早稲田大学大学院博士課程)

■「災害と演劇」総括と討議

〈司会〉小菅隼人(慶應義塾大学)

○「津波と芸能——東日本大震災以降の現状と課題」

橋本裕之(盛岡大学)

○「災害後演劇研究の方法」 毛利三彌(成城大学名誉教授)

伊藤裕夫氏からは専門の文化政策の観点から、主として1990年代以降の公共劇場とその環境をめぐる、震災後の復興を促進するための環境整備に関する提言がなされた。また、橋本裕之氏からは、岩手県内沿岸部で罹災した芸能に対する支援の仲立ちをおこなっている経験から、研究者が地域の芸能にどのような貢献ができるのか、という問題が提出された。毛利三彌氏からは、橋本氏の講演を受けて、ヨーロッパ近代劇的な意味における「ドラマ」が、本質的に震災後の現地では「不可能」なのではないか、という疑義が呈された。

さまざまな分野の研究者が集まり、大会テーマに沿った議論が展開され、演劇・映像分野の研究コミュニティ間の交流促進をも目的のひとつに据えている演劇映像学連携研究拠点にとって、早稲田大学における「秋の研究集会」の開催は、グローバルCOEなどを含めた本学の人的ネットワークの助けを借りながらも、バラエティに富んだ有意義な試みであったといえよう。芸能史研究、能楽研究、歌舞伎研究、近現代日本演劇研究、ヨーロッパ演劇研究、文化政策研究、批評理論などの研究者が一堂に会した集会は、盛会のうちに幕を閉じた。

しかしその一方で、2011年6月にグローバルCOEで開催されたフォーラム「大震災と芸術文化 現場からの証言」と同様、今回の研究集会においても、原発という国家的な問題についてはほとんど触れられることがなく、まだまだ議論の余白は大きいようにも思われる。(宮信明)



左から秋葉裕一氏、鴻英良氏、谷川道子氏、藤井慎太郎氏、内野儀氏

「翻訳プロジェクト」公開原稿一覧

※一部は2013年3月末公開開始予定。

《はじめに》

竹本幹夫「ご挨拶」(2010年度)
 鴻英良「翻訳プロジェクトについて」(2010年度)
 秋葉裕一「活動の概要」(2011-2012年度)

ヨーロッパ世紀末転換期演劇論

ドイツ

〔解説〕谷川道子「ドイツ19世紀末転換期の演劇事情とテキスト解説」

オットー・ブラム、ゲーアハルト・ハウプトマン「往復書簡」(1889) (版権の関係上、演劇博物館紀要『演劇研究』第35号に掲載)	訳: 本田雅也
オットー・ブラム「現代生活のための自由舞台一創刊の辞」(1890)	訳: 本田雅也
ゲーアハルト・ハウプトマン「オットー・ブラムの葬儀に際しての弔辞」 (1912年12月1日)」(1912)	訳: 本田雅也
ゲーアハルト・ハウプトマン「ノーベル賞の意義(1912年12月10日、 ストックホルムのノーベル賞晩餐会で行なわれた講演)」	訳: 本田雅也
オットー・ブラム「自然主義と演劇」(1891)	訳: 本田雅也
マックス・ラインハルト「ラインハルト、自らの芸術について語る」 (1916年のインタビュー)」(1916)	訳: 坂巻隆裕
マックス・ラインハルト『『真夏の夜の夢』1905年上演の演出の手引き から』(1905)	訳: 坂巻隆裕
フーゴ・フォン・ホフマンスタール「ラインハルトの仕事」(1928)	訳: 坂巻隆裕
ゲオルグ・ルカーチ『近代戯曲の発展史』(1911、抄訳)	訳: 谷川道子

英米

〔解説〕内野儀「英米の世紀末転換期から1930年代までの演劇と演劇論」

ウィリアム・アーチャー「ほんとうのイブセン」(1901)	訳: 内野儀
エドワード・ゴードン・クレイグ「俳優と超人形」(1907)	訳: 内野儀
ガートレード・スタイン「さまざまな劇」(1935)	訳: 小澤英実

フランス・ベルギー

〔解説〕藤井慎太郎「フランス語圏の演劇論」

モーリス・メーテルラン「閑話〜演劇について〜」(1890)	訳: 穴澤万里子
アドルフ・アッピア「ドラマと演出の将来」(1918-1919)	訳: 田中晴子
アドルフ・アッピア「リトミック体操と演劇」(1911)	訳: 田中晴子
アンドレ・アントワヌ(編)「自由劇場」(1890)	訳: 横山義志
アンドレ・アントワヌ「演出についてのおしゃべり」(1903)	訳: 横山義志
アンドレ・アントワヌ「現代の俳優術」(1924)	訳: 横山義志
ジャック・コポー「ドラマの革新の試み」(1903)	訳: 田中晴子
モーリス・ポトゥシェール「人民劇場」(1899)	訳: 田中晴子
民衆劇場創設委員会「公教育・美術大臣への手紙」(1889)	訳: 田中晴子
フィルマン・ジェミエ「明日の演劇とシェイクスピア協会」(1917)	訳: 田中晴子

ロシア

〔解説〕鴻英良「二十世紀ロシア芸術の囀」

レオニード・アンドレーエフ『野鴨』(1901)	訳: 塚原孝
ヴァレリー・ブリューソフ「不必要な真実 (モスクワ芸術座について)」(1902)	訳: 平松潤奈
ヴァチスラフ・イワノフ「予感と兆 新たな有機的時代と未来の演劇」(1906)	訳: 鴻英良
アレクサンドル・ブローケ「ヘンリック・イブセン」(1908)	訳: 岩崎理恵
アンドレイ・ペーレイ「演劇と現代のドラマ」(1908)	訳: 八木君人
レオニード・サバネーエフ「色と色彩の相関関係について」(1911)	訳: 梅津紀雄
チャールズ・S.マイヤーズ「共感覚の2つの事例」(1914)	訳: 梅津紀雄

各国現代演劇論(ラテンアメリカ編)

〔解説〕里見実「中南米演劇 解題のためのノート」

メキシコ

ルイス・バルデス「エル・テアトロ・カンパシーノ—— その発端」(1966)	訳: 里見実
アニック・トゥルグール「チカーノ演劇イパニック的 伝統と「アクト」の革新」(1991)	訳: 里見実
ドナルド・H・フリッシュマン「現代マヤ演劇と民族紛争 ——歴史の再発見と再解釈」(1995)	訳: 里見実

ペルー

ミゲル・ルビオ・サバタ「アンデスの人々との出会い」(1983)	訳: 里見実
ミゲル・ルビオ・サバタ「北京オペラ(京劇)について のノートと考察」(1995)	訳: 里見実

コロンビア

エンリケ・フェナベントウーラ「コロンビアの新しい演劇」(1979)	訳: 里見実
エンリケ・フェナベントウーラ「文化と政治」(1987)	訳: 里見実
「エンリケ・フェナベントウーラとのインタビュー」(1981)	訳: 里見実
サンティアゴ・ガルシア「コロンビアにおける「新しい演劇」の運動と非 アリストテレス的演劇」(1983)	訳: 里見実
サンティアゴ・ガルシア「ケベードの壁掛けの向こうに見える世界」(1992)	訳: 里見実
サンティアゴ・ガルシア「現代演劇における記憶と神話」(2005)	訳: 里見実

ウルグアイ

アタワルパ・デル・シオッポ 「わが大陸の民衆が必要とする演劇を、集団創作は培う方途となるのか もしれない」(1979)	訳: 里見実
---	--------

ブラジル

アウグスト・ボアル「演劇を通して何かを言いたい俳優と 俳優のための200のエクササイズとゲーム」(1988)	訳: 里見実
---	--------

各国現代演劇論(中国編)

〔解説〕平林宣和「演劇博物館連携研究拠点翻訳プロジェクト中国部門、
および傅謹氏の論文「東洋芸術のアイデンティティ—梅蘭芳の1930年訪
米公演の文化的解釈」について」

〔解説〕瀬戸宏「解説・焦菊隱『演出家・作家・作品』」

焦菊隱「演出家・作家・作品」(1962)	訳: 瀬戸宏
傅謹「東洋芸術のアイデンティティ ——梅蘭芳訪米公演の文化的解釈」(2007)	訳: 平林宣和
傅謹「『百花齊放』と「推陳出新」——20世紀50年代における中国演 劇政策への新たな評価」(2002)	訳: 大野陽介
傅謹「『推陳出新』を論ず」(1998)	訳: 田村容子
傅謹「『講話』から「戯改」へ——20世紀中国演劇発展の歷程への一つ の視点」(2003)	訳: 藤野真子
傅謹「中国『禁演』50年史略論」(1999)	訳: 松浦恒雄
傅謹「“先生”たちの改革」(2005)	訳: 三須祐介
張頌甲「“歩みを進め”でも“形を換えず”——梅蘭芳、旧劇改革を語る」 (1949)	訳: 三須祐介
胡適「イブセン主義」(1918)	訳: 瀬戸宏
胡適「文学進化の概念と演劇改良」(1918)	訳: 瀬戸宏
胡適「梅蘭芳と中国演劇」(1930)	訳: 平林宣和

各国現代演劇論(東南アジア編)

〔解説〕松井憲太郎「アジアの現代演劇とコラボレーション」

C.J.W.-L. ウィー、リー・チーキン 「壁の向こう、その先のビジョンへ——クオ・パオクン、境界線を越えて」 (2003)	訳: 滝口健
ウジェーヌ・ヴァン・エルヴァン「ピープル・パワーの舞台を築く—— フィリピン教育演劇協会(PETA)」(1992)	訳: 高山リサ
クリッシェン・ジット「近現代東南アジア演劇概論」(1999)	訳: 吉田季実子

1938年問題研究会

翻訳プロジェクトでは、昨年度に発足した「1938年問題研究会」を継続的に開催している。既報の第1回(2011年7月)研究会「演劇における1938年問題——翻訳プロジェクトの新たな展開に向けて」、そして研究協力者である谷川道子氏(東京外国語大学名誉教授)を報告者とした第2回(2011年9月)の「1938年問題とは何か?——ペーター・ヴァイス『抵抗の美学』をめぐる」に続き、昨年度末の3月には、第3回研究会「スターリンと演劇——1930年代ソヴィエト政治史の側から」を行った。

ここではロシア政治史が専門の塩川伸明氏(東京大学教授)を講師に迎え、ソヴィエト政治史の概説を講演いただいたうえで、ロシア・アヴァンギャルド演劇が体制側に「抵抗」できずに包摂されていったプロセスの問題性を討議した。

2012年度には、現在までに3回の研究会が開かれている。

第4回(5月)では、ヨーロッパの近現代史を専門とする研究者である小沢弘明氏(千葉大学教授)を迎えて、世界史という視点から「1938年」の歴史的な問題性について討議を行った。歴史学的な視点から「1938年」を眺めたとき、ファシズム／反ファシズムという図式の問題性(反ファシズムの抽象性)や、1980年代以降の先進諸国における新自由主義の問題との関係性などが明らかになる。

こうした指摘を受けて、討議では身体論的な視座——第一次世界大戦後に顕在化した「健康な身体=健康な国民」という問題系など——や、1938年という象徴的年号における年表の作成方法についてが議論された。とりわけ後者においては、高校世界史の編集などに携わっている小沢氏による有益なアドバイスを受けることができた。

さらに第5回(7月)ではイタリアに眼を転じ、主として美術史・思想史の分野で近年めざましい研究成果が挙がっているファシズム期を焦点として、演劇評論家の田之倉稔氏を招聘し、イタリア未来派とファシズムをめぐるレクチャーをしていただいた。

ロシアやドイツ、日本と同じ後発資本主義国でありながら、イタリアにおいては対スターリニズム、対ナチズムのようなかたちで図式化された政治と芸術の抗争の痕跡(つまり対ファシズムとしての芸術)が見られない。その原因には、ひとつには歴史意識の問題がある。ドイツやロシアが「伝統」を創造しなければならなかったのに対して、イタリアはルネッサンスという「伝統」を共有していたからである。またいまひとつには、実際に1920年代においてはアヴァンギャルド芸術の衰退、つまり伝統回帰と秩序回帰が見られるということもあった。そのため、たとえば劇作家ピランデルロはファシストでありながら、その

ファシストとしての固有性を特定することが難しい。

田之倉氏の講演は、未来派の巨頭マリネッティが1913年に行った「ヴァリエテ演劇宣言」を歴史的に——フランス象徴主義、グランギニョル劇などとの関連において——位置づけると同時に、当時の文化的交流(チェザーレ・ミケーリスやアンジェロ・マリナ・リペリーノによるスラヴ文化の紹介)や政治思想(ムッソリーニがアナキスト系の社会主義から出発したこと)の観点から、1930年代までの文化事象を広く網羅的に語るものであった。

前記の問題系をめぐるのは、20世紀イタリア文化の若手研究者の参加を得たことで活発な議論が展開されたが、イタリア文化に関しては翻訳が全般的に少ないことを加味し、プロジェクト初年度「世紀末転換期演劇論」の補遺あるいは延長として、1910年代の未来派演劇論、1920年代のグラムシの劇評、1930年代の文化政策論などを何編か翻訳文献の候補として挙げることを暫定的な結論とした。

第6回(12月)では、ドイツを中心とするファシズム論を専門とする池田浩士氏(京都精華大学客員教授)を招聘して講演をいただき、その後、公開討議を行った。

翻訳プロジェクトでは初年度(2010年度)に谷川道子氏の翻訳によるジェルジ・ルカーチ『近代戯曲発展史』を公開しているが、池田氏は1970年代にこの一部の翻訳を出版している。また、ルカーチは1933年以降にソ連に滞在しながら著作の執筆を行っていたが、この時期にはじまる表現主義論争(そしてその過程における形式主義=ロシア・フォルマリズム批判)は現在進行中の——ロシア・ドイツを中心とする——「1938年問題」の主要な問題関心である。このような意味から、今回の研究会は初年度の「世紀末転換期演劇論」と「1938年問題」を接続するために必要不可欠なものとなった。

池田氏からは冒頭の90分間に「ナチス演劇をどう捉えるべきか」という主題で、ルカーチの生い立ちから表現主義論争の背景なども含めて、「芸術と政治(ファシズム)」についての基本的な問題認識をお話いただいた。また、次年度の翻訳が見込まれるテキストについて、多数翻訳をお持ちの池田氏ご自身から、具体的にお話をいただくことができ、プロジェクト全体の問題意識をいっそう深めることができた。会場にはロシア、ドイツのみならず、フランスやイタリアの20世紀芸術文化の研究者が参加しており、後半の討議・質疑応答においても充実した意見交換を行うことができた。

今後は、これまでの全6回の研究会を総括したうえで、いよいよ最終年度の翻訳文献の確定作業に入っていく。

(木村智哉)



塩川伸明氏

小沢弘明氏

池田浩士氏

田之倉稔氏

テーマ研究は拠点が研究テーマを提案して学外諸機関と連携した共同研究を行い、そこに広く研究者の参集を呼びかけるものです。研究内容は以下の8つで、研究期間は2009年から5年間を予定しています。2011年度、2012年度はそれぞれその3年目、4年目となりました。

研究代表者・分担者の肩書きは、年度末の成果報告時のものであり、現在の所属とは異なることがあります。

テーマ研究

1

日本における中国古典演劇の受容と研究

研究代表者：岡崎由美（早稲田大学文学学術院教授）

研究分担者：平林宣和（早稲田大学政治経済学学術院准教授）、川浩二（早稲田大学文学学術院非常勤講師）、岩田和子（早稲田大学文学学術院非常勤講師）、伴俊典（早稲田大学文学学術院非常勤講師）、黄仕忠（中国中山大学中国古文献研究所教授）、傅謹（中国戯曲学院教授）

【研究目的】

江戸期～明治・大正期に至るまでの間、日本に舶載された中国古典演劇資料および日本人によって作成された中国古典演劇の翻訳、注釈、評論、研究を対象とし、また明治末以降に顕在化した中国古典演劇（昆劇・京劇等）の実際の上演と日本人との直接の関わりも視野に含めつつ、日本が中国伝統演劇をいかに受容し、日中間の演劇を通じた文化・学術交流を形成したか、ということ明らかにする。

【研究成果の概要】

平成23 (2011) 年度

日本初の中国近世戯曲の全訳と見られる演劇博物館所蔵明代戯曲『水滸記』の江戸期日訳本および同系統抄本の山口大学所蔵『水滸記』、関西大学所蔵『水滸記』の発見（2010年度）を踏まえ、上記3種の版本比較をおこない、翻訳形成の過程を明らかにした（山口大学所蔵本→関西大学所蔵本→早稲田大学演劇博物館所蔵本）。加えて、翻訳が実際にどのようにおこなわれたかという具体的実態や、この翻訳事業にどのような人材や知識層が関わっていたかということも、詳らかなりつつある。演劇研究のみならず、近世日本の中国語翻訳史、日中文化交流史においても重要な意義をもつ研究であるといえよう。

また、江戸期の日本に舶載された中国古典演劇作品の一覧を作成した。これは日本が受容した中国古典演劇作品の傾向や、当時の中国での出版の様相を知るための貴重な資料となる。

明治期の研究者や文化人による中国古典戯曲の版本の収蔵や研究・評論活動については、近世の漢学受容から近代の新しい学術文化構築への転換という視点を軸として、東京専門学校（早稲田大学）を拠点に、森槐南、千葉鉞蔵、幸田露伴等の調査をおこなった。その結果、千葉鉞蔵コレクションの実態が明らかになりつつある。千葉コレクションは、久保天随旧蔵書などと同様に、日本の台湾統治期に旧台北帝国大学（現台湾大学）等の台湾の研究期間に収蔵されていたことが判明した。これは日本における中国古典演劇の受容やその研究活動を、漢籍収蔵史の文化的背景のひとつとして位置づけることを可能にするものである。

さらに、これまで明らかにされてこなかった中国古典演劇をめぐる日中間の直接的な関わりの様相を解明するために、早稲田大学演劇博物館所蔵の和書・貴重書に含まれる日本国内の中国古典演劇の上演関連資料を網羅的に調査、これらと中国国内の同時期の関連資料とを対照することにより、明治末から大正期にかけての日中間の芸術家、文化人、研究者の直接的な関わりの様

相が明かになりつつある。

平成24 (2012) 年度

江戸期における中国古典演劇テキストおよび参考書の調査から、曲譜受容の実態や唐話学習の流行による翻訳力のレベルの高さが明らかになった。また戯曲の受容については、物語を享受するのみならず、唐宋詩詞の受容の流れを汲む韻文文学の学習対象として「読曲」という形で受け入れられていた可能性が高いと考えられる。さらに、中国古典演劇の読解に際して、どのような曲譜や辞書、参考書が参照され得たか、という受容の環境についても分析が進んでいる。これらは舞台上での実際の上演の受容とは別に、中国の古典演劇脚本の形式を研究・理解することにより、明治期の森槐南による『補春天伝奇』の創作に結実する戯曲受容の流れを示唆している。

明治期における受容については、西洋近代文学研究の視点から中国古典演劇を考察する研究者らと、江戸漢学の流れを組み、鑑賞者と創作実践者の両面を併せ持つ文人的立場から中国古典演劇を享受する人々の、活動の俯瞰図ができつつある。この過程での資料として、早稲田大学演劇博物館所蔵の幸田露伴旧蔵『元人雑劇百種』附上評訳本があり、その版本に書きこまれた訳注が幸田露伴自身のものであるかどうかは、今後解明すべき課題であるが、明治初期の中国古典演劇テキスト受容の一端を示す大変貴重な資料であることは間違いない。

また、近代以降の京劇・昆劇の来日公演など、文字媒体に限定されない演劇そのものの直接の受容については、特に1919年の梅蘭芳初来日公演に関して、『順天時報』『申報』『台湾日日新報』および日本国内の新聞雑誌等、東アジア各地域の同時代資料を調査することによって、その文化的動態をより立体的に把握する作業をおこなった。これらの研究成果は順次公表する予定である。

従来、日本における中国古典小説の受容については研究の体系化が進んでいるが、中国古典演劇については個別の論考はあるものの、江戸から昭和初期までの受容の様相を文献と上演の両面から全体的に俯瞰しようとする試みは皆無であった。本プロジェクトはこのテーマに意欲的に取り組んでいるといえるもので、平成25 (2013) 年度においては、幸田露伴旧蔵『元人雑劇百種』の書誌調査・テキスト分析、明治期の中国古典演劇テキストの収蔵者・収蔵状況の調査、中国に所蔵される日本人の京劇評論活動関連資料の調査などの個別の研究とともに、その総括をおこないたい。

テーマ研究 2

台本による歌舞伎作品復元の調査・研究

研究代表者：古井戸秀夫（東京大学大学院人文社会系研究科教授）

研究分担者：児玉竜一（早稲田大学文学学術院教授）、今岡謙太郎（武蔵野美術大学教授）、鈴木英一（聖学院大学非常勤講師）、安富順（明治大学非常勤講師）、ローレンス・コミンズ（ポートランド州立大学教授）

【研究目的】

「台本による歌舞伎作品復元の研究」における研究目的は、演劇博物館の所蔵する歌舞伎台本をデータ化して公開することにより、埋もれている歌舞伎の文化資源を発掘、調査、復元するための基礎を構築することにある。研究は、①演劇博物館所蔵歌舞伎台本のデータ化と、②個別研究1－6からなる。

個別研究1「鶴屋南北の台本研究」（担当：古井戸）

個別研究2「歌舞伎舞踊台本の研究」（担当：鈴木）

個別研究3「黙阿弥の台本研究」（担当：今岡）

個別研究4「義太夫狂言の台本研究」（担当：児玉）

個別研究5「大坂歌舞伎の台本研究」（担当：安富）

個別研究6「初代市川團十郎の歌舞伎復活の研究」（担当：コミンズ）

【研究成果の概要】

平成23（2011）年度

「台本による歌舞伎作品復元の研究」は、早稲田大学演劇博物館に所蔵されている歌舞伎台本をデータ化して公開するための準備研究であり、その目的はデータ化した資料を利用して文化資源化し、復活上演を試みることにある。平成23（2011）年度の研究成果は、以下の通りである。

歌舞伎台本その他の資料のデータ化は、①歌舞伎台本（東京大学・池田文庫）、②歌舞伎番付（秋葉文庫他）、③薄物正本（黒木文庫他）、④歌舞伎雑誌（戦中戦後）に取り組んだ。

なお、データ化の前提となる、ムシ喰い補修に関する研究は、休止したままである。

また併せて、歌舞伎台本その他の資料の調査として、姫路市立図書館所蔵歌舞伎台本の調査をおこなった。

復元の研究としては、国立劇場復活上演のための準備台本『大塔宮囃子』（児玉竜一監修）を作成した。

復活上演の成果として、①国立劇場276回、平成24年正月歌舞伎公演、河竹黙阿弥作・鈴木英一補綴「奴唄春風」がある。

平成24（2012）年度

歌舞伎台本の調査を進め、将来的なホームページ上での公開に備えるための準備をおこなった。とくに整理番号16のシリーズは、作者自筆台本を含む、貴重なコレクションとして知られてお

り、すでに大半の撮影を終えている。調査によって、撮影の漏れのないことを確認、さらに、虫損によって撮影できなかったものを確認し、撮影のために必要な補修について検討をおこなった。

ほかに、京都大学附属図書館、阪急学園池田文庫などにおいて、歌舞伎台本の調査をおこなった。来年度に向けて、研究代表者・分担者・協力者がこれまでに撮影してきた台本の整理・検討を踏まえて、撮影を依頼、総合的な資料収集をおこなう予定である。

歌舞伎台本の周辺資料のデータ化については、演劇雑誌のなかで最も代表的なものである『演芸画報』のデータ化に着手し、大正期のデータ化を完了した。大正期は、好景気ともあいまって、演劇雑誌が毎月非常に大冊であった時代で、すでにデータ化を完了した『新演芸』と併せて、近代歌舞伎の研究のために、活字化された歌舞伎台本の発掘のために、非常に貴重な資料となるものである。

また、表紙は美術の点からも興味深く、『演芸画報』が浮世絵もしくは新版画の系統を主とするのに対して、『新演芸』は洋画による大首絵を常としており、和風と洋風の表紙絵の対照は、おのずから、正統の歌舞伎雑誌と、西洋演劇にも容喙して多岐にわたる対象を扱った演劇雑誌との、内容の対照に比例している。加えて大阪発行の雑誌『道頓堀』などのデータ化を進める予定である。

さらに、演劇博物館台本の定期的な調査にあわせて、興行記録に関するデータベース化も進めた。

復活上演台本の作成については、古井戸秀夫補綴によって、舞踊の大作「菅原草紙」（国立劇場134回、平成24年5月舞踊公演、渥美清太郎作）が上演された。花柳舞踊研究会で初演された作品の復活上演で、主催者花柳壽輔氏からの指名によるものの、「菅原伝授手習鑑」全段を舞踊作品に網羅しつつ、花柳流を主力とした大舞踊家団を縦横に活用した大作となった。また、この過程において、花柳流および家元花柳壽輔氏との連携によって、宝塚歌劇における日本舞踊、民俗芸能などをめぐる研究をおこなうことができた。あわせて研究代表者の古井戸、研究分担者の児玉、鈴木、今岡が国立劇場復活上演演目検討委員会に参加し、復活上演演目と台本について検討をおこなった。歌舞伎の本興行において、外部から上演台本補綴の手が加わることはきわめて稀であり、本研究グループの実績の稀少性を強調しておきたい。

テーマ研究 3

舞台芸術 創造とその環境 日本／世界

研究代表者：藤井慎太郎（早稲田大学文学学術院教授）

研究分担者：上田洋子（早稲田大学文学学術院非常勤講師）、曾田修司（跡見学園大学教授）、松井憲太郎（富士見市民文化会館キラリふじみ館長）、恵志美奈子（世田谷パブリックシアター学芸職員）、間瀬幸江（早稲田大学文学学術院助教）、梅山いつき（学術振興会特別研究員PD）、秋野有紀（学術振興会特別研究員PD）

【研究目的】

本研究は、舞台芸術における創造と環境の関係を可能な限り、地理的・時代的・方法的に多面的に分析しようとするものである。第一に、それは一方では、創造行為に従事する芸術家の視点から、他方では、芸術家の行為をとときに規制しときに支援する公的な制度の視点から、舞台芸術をとらえ直すことを意味する。そのために、世界的に第一線で活躍する研究者と芸術家との共同作業を重視し、学術的な研究会・シンポジウムに加えて、ときにワークショップ、パフォーマンスも実験的・実践的な研究プロジェクトとして実施する。第二に、日本の国外で日本の舞台芸術専門の研究者を多くそろえることによって、国際比較をより容易にするとともに、国内でなされている研究に対して豊かなフィードバックと対話をもたらす。すべての研究会・セミナー、研究集会・シンポジウムは一般に公開し、日本の舞台芸術を取り巻く環境に、研究成果を広く還元する。

【研究成果の概要】

平成23（2011）年度

一方では、学外組織、とりわけ舞台芸術創造の現場にある組織との連携の上、世界各地の舞台芸術の創造とその環境に関して各国の人物を招聘して公開研究会を開催し、もう一方では、オーラル・ヒストリー・アーカイヴ構築に向けての準備を進め、平成23（2011）年度は、以下のような成果を上げることができた。

国際交流基金と連携して、ナイセ・ロペス（フェスティバル・パノラマ・ディレクター）、クリスティーネ・グライナー（サンパウロ・カトリック大学）両氏を大学に招いて、「ブラジルの現代舞台芸術とその環境」と題した研究会を開催し、日本ではあまり知られていないブラジルの芸術環境についての貴重な情報を得ることができた。

また、フェスティバル／トーキョーと連携してのF/Tユニバーシティでは、現代演劇研究の第一人者で、国際的にも名高いハンス＝ティース・レーマン氏（フランクフルト大学）をドイツから招聘して、連続講義「カストロフェー・アナグノーリシス・カタルシス 悲劇の三概念とその今日的意義」を開催した。同様に、フランスを代表する振付家ジェローム・ベル氏によるビデオ・レクチャーをおこなった。いずれも募集後すぐに定員に達するなど、大きな反響があり、とりわけ、レーマン氏によるレクチャーは英語のみによる、高度な内容の3回連続講義であったにもかかわらず、受講者の意欲は高く、質疑応答も活発で、理想に近いかたちでレクチャーを実施することができた。なお、レーマン氏については、ドイツ語によるレクチャー「ベルトルト・ブレヒトからハイナー・ミュラーへ 演劇と（脱）教育」もあわせて開催した。

さらに、TPAM in Yokohama（国際舞台芸術ミーティング）と連携して、フランスの演出家フィリップ・ケヌヌ氏を大学に招聘し

てのビデオ・レクチャー「フィリップ・ケヌヌ自身によるフィリップ・ケヌヌ」を開催した。氏のこれまでの歩みを振り返るとともに、作品の映像も交えながら、戯曲が先にあるわけではない氏の作品が、何を出発点としてどのように構築されていくのか、創作の方法論についてうかがった。

オーラル・ヒストリーについては、舞台芸術におけるオーラル・ヒストリー・アーカイヴの構築を目指して、5回の研究会を開催するとともに、日本におけるフラメンコの発展・普及に大きな役割を果たした小島章司氏に対して聞き取り調査を実施し、インタビューをテキストにまとめた。

平成24（2012）年度

平成24（2012）年度は、年末までに計6回のオーラル・ヒストリーの定例研究会を開催し、オーラル・ヒストリーの方法について議論するとともに、フラメンコ・ダンサー・振付家である小島章司氏のインタビュー原稿の校正（聞き手・校閲：佐野勝也、竹田恵子）、バレエ・ダンサーとして活躍した後、教育に従事した鈴木光代氏のインタビュー実施、テープ起こし、原稿の校閲（聞き手・校閲：斎藤慶子、柳下恵美）をおこなった。年度末までにあと1、2本のインタビューを実施し、原稿化する予定である。

また、世界的に知られる現代ダンスのカンパニー、レ・バレエ・C・ドウ・ラ・Bを率いる振付家・演出家で、ダンス・トリエンナーレ・トーキョーに作品『Out of Context - For Pina』が招聘されたアラン・プラテル氏を招き、研究代表者の藤井慎太郎が聞き手となって、同作品の創作の方法論と背景、ベルギー・フランドル地方に固有の歴史的・文化的文脈についてうかがい、国籍とジャンルの壁を越えて創造され得るダンスの可能性について検討した。

さらに、演劇映像学連携研究拠点主催企画、日仏共同国際シンポジウム「演劇と演劇性」（詳細はp.1～p.3を参照）と同時期に、フランスよりジョゼット・フェラル氏（パリ第3大学教授）を招聘し、太陽劇団に関する公開レクチャー「演劇とユートピア アリアヌ・ムヌーシュキンと太陽劇団」を開催した。活動が半世紀近くにおよぶ同劇団の特徴であるムヌーシュキンの政治性、集団創造という手法、それを支えるユートピア思想、作品テーマの変遷などについて講演いただき、現代ヨーロッパにおける太陽劇団の位置づけを再確認することで、演劇とパブリックのあり方について考察を深めた。

F/Tユニバーシティでは、イラン人演出家アミール・レザ・コヘスタニ氏（ナビゲーター：鴻英良氏）、韓国人演出家ユン・ハンソル氏（ナビゲーター：森山直人氏）という、第一線の演出家を講師に迎え、それぞれ3時間にわたって、その創造の方法論をうかがい、日本では充分に知られているとはいえないイラン演劇、韓国演劇の歴史的・社会的文脈について知る格好の機会となった。

テーマ研究

4

演劇博物館所蔵映画フィルムの調査、目録整備と保存活用

研究代表者：入江良郎（東京国立近代美術館フィルムセンター主任研究員）

研究分担者：児玉竜一（早稲田大学文学学術院教授）、上田学（早稲田大学演劇博物館招聘研究員）、榎本章（東京国立近代美術館フィルムセンター主任研究員）、岡田秀則（東京国立近代美術館フィルムセンター主任研究員）、板倉史明（東京国立近代美術館フィルムセンター主任研究員）、碓井みちこ（関東学院大学文学部専任講師）、金子健（文化庁文化財部伝統文化課芸能部門文部科学技官）

【研究目的】

演劇博物館が所蔵する全映画フィルムを対象に、フォーマット別（35mm、16mm、8mmなど）に分類したうえで、それぞれのフォーマットに最適と思われる方法で、所蔵情報（フィルム・フォーマットや長さ、素材のコンディションなど）と、作品情報（フィルム上の文字情報や内容）の両面にわたる基礎調査を進め、将来のコレクションの管理、運用の手がかりとなるデータの整備をおこなうことで、映画フィルムの内容や状態など、これまで未調査の項目を含めて、コレクションの全貌が明らかになるのみならず、将来のコレクション管理、運用に際し必要となる情報の取得を容易にする。また、とくに重要と思われるコレクションについてはより綿密な研究調査を実施し、緊急の復元が必要と判断されるフィルムについては上映プリントやデジタル・メディアの作成をおこなうとともに、上映やWeb上での公開、また研究報告などを通して、コレクションの重要性を内外にアピールし、成果を広く社会に公表する。

【研究成果の概要】

平成23（2011）年度

演劇博物館が所蔵する全映画フィルム・コレクションの目録整備と活用の推進を目標とする本研究では、平成22（2010）年度に引き続き、①個々のフィルムの作品情報（内容や文字情報など）と、②所蔵情報（規格の詳細や尺長、コンディションなど）の調査を、コレクションの規格毎に実施した。

平成23（2011）年度は、平成22（2010）年度に続き16mmフィルムと35mmフィルムを対象に、編集台（スチーンバック）を用いた検査ならびに調査カードの作成、画面に記載された文字情報の採集をおこない、この2年間で全ての作業を終えた。16mmフィルムの総数は564本（平成23年度の検査本数は105本）、35mmフィルムの総数は53本（全て平成23年度の検査）である。これにより、8mmフィルム271本を含む全コレクション888本の基礎調査が完了したことになる（8mmフィルムについては、平成22年度までに所蔵情報の採集とデジタル・メディアへの変換を完了。ただしほとんどのコレクションでクレジット情報など文字情報が得られないため、デジタル・メディアを用いた内容調査を継続中）。なお、検査の結果に伴いコレクションの数には訂正が加えられている。

上記に加えて、35mmフィルムの検査では、新たに8本のナイトレート（可燃性）・フィルムが確認された。さらに、早稲田大学内からナイトレート・フィルム2本（同一作品2組、『躍動する回教

徒』、1940年）が移管されたため、可燃性フィルムのコレクションは全部で31本を数えている。

これらの調査と平行して、本研究では、ナイトレート・フィルムを保管しているIMAGICAウェストと大阪歴史博物館を訪問し、可燃性フィルムの保管施設・方法の視察をおこなった（6月14日）。その結果を踏まえながら、今後の取り扱いについて最良の方法を検討したい。

検査を終えたフィルムのうち、特に重要と思われるコレクションについては、分担者による専門研究や論考執筆、ニュー・プリントの作成などを予定しており、平成23（2011）年度はその最初の打ち合わせをおこなうとともに（7月19日）、ニュー・プリントの作成を開始し、年度内に計6作品の作業を終えた。

上記の他、平成22（2010）年度までにメディア変換を行ったフィルムの映像が、演劇博物館の展覧会「日活向島と新派映画の時代展」（平成23年12月3日～平成24年3月25日）に出品、公開された。

平成24（2012）年度

16mmフィルム564本分、35mmフィルム32本（うち可燃性フィルム10本）について、編集台（スチーンバック）を用いた検査で平成23（2011）年度までに採集したコマ抜き情報のデータ登録を終えた。これにより、平成22（2010）年度までに収蔵された16mmフィルムおよび35mmフィルムの基礎的なデータ整備作業をほぼ終えることができた。また、重要と思われるコレクションの中から平成24（2012）年度は日本映画4本を選び、所蔵の16mmデュープ・ネガから35mmニュー・プリントの作成を実施した。一部の外国映画については、公開時に必要となる日本語字幕のデータ作成をあわせておこなった。

上記の他、平成23（2011）年度、新たに収集された35mm可燃性フィルム（玩具映画）15本、9.5mmフィルム4本については、所蔵情報の採集とDVCAM / DVDへのメディア変換をおこない、データ登録の準備を終えた。これら新規収蔵フィルムの追加により、コレクションの数量は、8mmフィルム271本、9.5mmフィルム5本、16mmフィルム564本、35mmフィルム68本（うち可燃性フィルム46本）、総計908本を数えている。

今後は、所蔵フィルムの基礎調査をほぼ終えたことに伴い、特に重要と思われるコレクションを対象にしたニュー・プリント等アクセス・メディアの作成をおこないつつ、成果報告の準備を進めてゆく。

テーマ研究 5

日本映画、その史的社会的諸相の研究

研究代表者：岩本憲児（日本大学芸術学部大学院映像芸術専攻教授）

研究分担者：アンニ（明治学院大学言語文化研究所研究員）、金ジョンミン（東京大学人文社会系研究科博士後期課程）、古賀太（日本大学芸術学部教授）、蔡宜静（台湾康寧大学助理教授）、志村三代子（早稲田大学演劇博物館招聘研究員）、田島良一（日本大学芸術学部教授）、土田環（映画専門大学大学院助教）、中山信子（早稲田大学ジェンダー研究所客員研究員）、渡邉大輔（日本大学芸術学部非常勤講師）

【研究目的】

本研究では、映画がどのように国内外の社会に受け入れられたかを中心に、受容と評価の歴史に新たな光を当ててゆく。特に映画が社会現象的な広がりを持ち、国境を越えて進出し、あるいはプロパガンダの一翼を担った例を具体的に検討する。受容をめぐる国内外の社会的文化的差異、評価と受容の不均衡が論じられることになるだろう。具体的には、外国において日本映画がどのように上映され、受け入れられていったかを、いくつかの国に絞って調査する。また、日本において映画がどのような評価を受け、社会的なイメージを形成していったのかを、作品や時代を限定して調査する。雑誌や新聞などの文章のみならず、広告や興行成績なども参照して、映画が流行の一部となり、社会現象的な広がりをもった例を具体的に検討したい。

【研究成果の概要】

平成23（2011）年度

日本映画の海外進出について、主に満州事変から大東亜戦争期まで、一方では欧米への進出・紹介の跡をたどり、他方では日本がアジア諸国へ送り出した映画に焦点を当てた。この結果、欧米向けの映画紹介と、戦時下の中国・殖民地化の国々での映画上映とが、それぞれどのような目的と役割を担ったのか、その相違点が浮かび上がってきた。前者では「伝統と近代化に成功した日本」イメージであり、後者では「アジアの近代化に貢献する日本」イメージである。したがって、国内の調査については、個別的な映画作品よりも、民間の「国際映画新聞」および外務省系の国際文化振興会や観光局が製作・支援した短編映画群の動向に重点を置いて、日本映画の「国際性」の意味を問う1年となった。ほかに、サイレント期の映画（『十字路』）がパリにおいて好評であったことを示す資料の発見、韓国映画最初期の劇映画が日本とどのような関係にあったのかの再検討、日本統治下の台湾で製作された文化映画（日本国策映画の延長線上にある）の見直し、対米戦争開始後のアメリカ・プロパガンダ映画に見る日系人の表象など、各分担者からの報告がなされた。また、年度の最終研究会では、張新民氏を招聘し、「日本占領下の華北における日本映画」と題して、日本軍占領下の中国華北地域における、映画館設置状況や配給網整備、および宣撫映画巡回映写活動などを概説、日本による映画工作状況を報告いただいた。それを受けて、これまで明らかになったこと、いまだ調査途上にあることなどを踏まえなが

ら、共同討議「戦前戦時下における日本映画の海外進出をめぐる」をおこなった。

平成24（2012）年度

1945年から1960年頃までの日本映画を対象に、その国内外での受容と評価の差異を多角的に検討する平成24（2012）年度の活動では、戦後日本映画の国際的認知の指標となった『羅生門』公開前後の50年代を中心に、幅広い研究報告がなされた。当該時期は、敗戦を経過し、第二の黄金期を迎えた日本映画が、次々と国際映画祭の場で高い評価を獲得し、日本映画の国際進出が進んだ重要な時期である。にもかかわらず、その受容と評価の差異を丹念に追った研究成果はいまだ乏しいといわねばならない。

平成24（2012）年度は、まず、日本映画史研究において、これまであまり分析されてこなかった戦後の日台、日中の比較映画史的な考察をはじめ、ドイツやフランスにおける日本映画の受容や紹介の詳細など、各国別に多様な主題の研究結果が集まった。とりわけ、アメリカ公文書館所蔵の貴重な対日関係資料の調査に基づいた占領期アメリカの日本イメージに関する報告などは、きわめてユニークなものである。また、占領期に連合国軍からもたらされたナトコ映画と、当時の国内の映画教育の運動との関わりに注目した、日本国内での受容過程を辿った研究もなされた。

研究分担者以外にも、国内招聘講師の岡田秀則氏からは「日本の色彩映画―1953年―を検証する」と題して、日本の初期色彩映画に関して、またイラン・グエン氏からは「国際情勢から見た日本語の〈アニメーション〉と〈アニメーション作家〉の流用について：大藤信郎から久里洋二への軌跡を中心に」と題して、50年代日本のアニメーション言説に関して、それぞれ戦後日本映画がはらんだ多面的な問題について興味深い報告がなされた。さらに、海外招聘講師として、ハロルド・ザーロモン氏からは、「ドイツにおける日本映画の受容：『羅生門』以前」と題して、戦前ドイツにおける日本映画の情報が多数紹介され、マイケル・バスケット氏からは、「冷戦期アメリカが観た日本映画界：ジョンストン・ブランの役割」と題して、戦後冷戦下のアメリカにおける日本映画の受容についてうかがった。

来年度は、60年代以降から現代までの日本映画を対象とし、継続してきたテーマ研究の総括をおこなう。また、総括としての全体論集を企画、その刊行までを目標としたい。

テーマ研究

6

演劇研究基盤整備：舞台芸術文献の翻訳と公開

研究代表者：秋葉裕一（早稲田大学理工学術院教授）

研究分担者：竹本幹夫（早稲田大学文学学術院教授）、藤井慎太郎（早稲田大学文学学術院教授）、平林宣和（早稲田大学政治経済学術院准教授）、堀切克洋（東京大学大学院総合文化研究科博士課程）

【研究目的】

本研究課題は、日本国外で刊行された未邦訳の舞台芸術関連文献を翻訳し、ウェブ上で無償公開することを目的とするものである。従来、専門外の読者がアクセスすることが困難であったテキストの翻訳を公開することによって、学生や一般読者も含めた多くの人々が、舞台芸術における教養的な理解を共有することが期待される。また、読者からの声を研究組織内に反映することによって、現代演劇に関する互恵的な議論を生み出すことも目指される。さらに、「ヨーロッパ地域における〈1938年問題〉」（1938年前後に起こった社会的・政治的・文化的変動を領域横断的な眼差しで捉え直す試み）や「各国現代演劇論（東南アジア編、中国編、ラテンアメリカ編）」など、独自のテーマ設定によって、これまでに十分な議論がなされてこなかった領域の知識を共有し、演劇研究全体に啓発を図ることを目的とする。

【研究成果の概要】

平成23（2011）年度

ヨーロッパ各地域（ロシア、ドイツ、フランス、アメリカなど）における演劇研究者の参集によって平成22（2010）年度に開始した本研究課題では、平成23（2011）年度より新たに中国や東南アジア地域に対象地域を拡大し、翻訳文献のさらなる拡充を図る一方で、ヨーロッパ地域における新テーマとして、1930年代のヨーロッパにおける文化的、社会的、政治的変動を言語横断的に分析する「1938年問題研究会」を立ち上げ、合計3回の公開研究会を開催した。また、初年度の成果である「ヨーロッパ世紀末転換期演劇論」に関しては、2011年12月に早稲田大学において開かれた「日本演劇学会 秋の研究集会」との共催によってシンポジウムを開催し、本研究課題全体に関する方針を含め、数多くの演劇研究者・批評家に対して積極的な情報発信をおこなった（詳細はp.3を参照）。

平成23（2011）年度の具体的な成果物としては、以下11件（前年度の増補版3件を含む）の外国語文献の翻訳および3件の解説文の公開が挙げられる（プロジェクト特設サイトにおいて無償公開）。【ドイツ】ジェルジ・ルカーチ『近代戯曲の発展史』（谷川道子訳）【フランス・ベルギー】アンドレ・アントワヌ編『自由劇場』（横山義志訳）、モーリス・ポトゥシェール『人民劇場』（田中晴子訳）、モーリス・メーテルランク『小話～演劇について～』（穴澤万里子訳）【中国】傳謹『東洋芸術のアイデンティティ』（平林宣和訳）、焦菊隱『演出家・作家・作品』（瀬戸宏訳）【メキシコ】ドナルド・H・フリッシュマン『現代マヤ演劇と民族紛争』（里見実訳）【ペルー】ミゲル・ルビオ・サバタ『北京オペラについてのノートと考察』（里見実訳）【コロンビア】エンリケ・ブエナVENTOURA『コロンビアの新しい演劇』『文化と政治』（里見実訳）【ブラジル】アウグスト・ボアル『演劇を通して何かを言いたい俳優と俳優のための200のエクササイズとゲーム』（里見実訳）【中国解説】瀬戸宏「解説 焦菊隱『演出家・作家・作品』」、平林宣和「解説 傳謹『東洋芸術のアイデンティティ』」【ラテンアメリカ解説】里見実「中南米演劇 解題のためのノート」

平成24（2012）年度

平成24（2012）年度は、中国・ラテンアメリカ・東南アジアの現代演劇に関する文献の翻訳・公開をおこなっている。2012年末を原稿の締切として、2013年1月より編集・校正を開始、2013年2月下旬～3月上旬にアップロードを開始する。

なお、中国演劇については研究分担者の平林宣和氏の助力によって、翻訳分担者に若手研究者を多数迎えることができた。ラテンアメリカ演劇については前年度より継続で里見実（國學院大学名誉教授）氏による文献の斡旋および翻訳を得ることができた。東南アジア演劇については、松井憲太郎（キラリ☆ふじみ館長）氏のご協力の下で、英語による概説を中心に文献を選定、さらには若手の翻訳分担者の協力を得ることができた。

1930年代のヨーロッパにおける文化的、社会的、政治的変動を言語横断的に分析する「1938年問題研究会」についても、合計3回の公開研究会を開催した（詳細はp.5を参照）。

平成24（2012）年度の具体的な成果物としては、以下17件の外国語文献の翻訳・解題の公開が挙げられる（プロジェクト特設サイトにおいて無償公開予定）。【中国】傳謹『『百花齊放』と『推陳出新』——20世紀50年代における中国演劇政策への新たな評価』（大野陽介訳）、傳謹『『推陳出新』を論ず』（田村容子訳）、傳謹『『講話』から“戯改”へ——20世紀中国演劇発展の歷程への一つの視角』（藤野真子訳）、傳謹『新中国『禁演』五十年史略』（松浦恒雄訳）、傳謹『“先生”たちの改革／張頌甲『“歩みを進め”ても“形を換えず”——梅蘭芳、旧劇改革を語る』（三須祐介訳）、胡適『イプセン主義』『文学進化の概念と演劇改良』（瀬戸宏訳）、胡適『梅蘭芳と中国戯劇』（平林宣和訳）【ラテンアメリカ】アタワルパ・デル・シオッポ『わが大陸の民衆が必要とする演劇を、集団創作は培う方途となるのかもしれない』／「エンリケ・ブエナVENTOURAとのインタビュー」／サンティアゴ・ガルシア『コロンビアにおける『新しい演劇』の運動と非アリストテレスの演劇』『ケベドの壁掛けの向こうに見える世界』『現代演劇における記憶と神話』（里見実訳）【東南アジア】C.J.W.-L. ウィー、リー・チーキン『壁の向こう、その先のビジョンへ：クオ・パオクン、境界線を越えて』（滝口健訳）、ウジェーヌ・ヴァン・エルヴァン『ピープル・パワーの舞台を築く～フィリピン教育演劇協会（PETA）』（高山リサ訳）、クリンシェン・ジット『近現代東南アジア演劇概論』（吉田季実子訳）

なお、翻訳文献の選定については初年度の方法を踏襲し、言語別に設けられた翻訳代表者（谷川、藤井、鴻、里見、平林）が主導的に対象文献を探索し、若手研究者を含む翻訳分担者の斡旋をおこなった。また、課題全体の方針については、必要に応じて各代表者に参集を呼びかけ、全員の承認を経て決定した。

初年度に著作権許諾がプリントのみの契約となったブラーム＝ハウプトマンの「往復書簡」（訳：本田雅也）については、予定通り『演劇研究』第35号のなかに収録され、2012年3月に発刊された。今後も契約上、ウェブでの翻訳公開が認められない場合は、同様に対処することとする。

能、昆劇の比較研究—日中伝統演劇の現在と未来

研究代表者：佐藤信（座・高円寺芸術監督、劇作家、演出家）

研究分担者：竹本幹夫（早稲田大学文学学術院教授）、鈴木直子（早稲田大学文学学術院非常勤講師）、梅山いつき（（日本学術振興会特別研究員PD）、内野儀（東京大学総合文化研究科教授）、ダニー・ユン（香港現代文化研究所代表）、川口智子（座・高円寺企画、制作）

【研究目的】

平成13（2001）年に共にユネスコ世界無形文化遺産の指定を受けた日中の伝統演劇、能と昆劇は、それぞれが依拠する「謡曲」「昆曲」との関係性など、演劇的な共通部分が少なくない。本研究は、世界の共通遺産としてその価値が認定された能・昆劇について、従来必ずしも着目されてこなかった継承者の育成、芸芸、演目の継承、発展を対象にした公的な支援、およびあたらしい創造への探求についての比較研究を目的としている。具体的には、日中の研究者、能・昆劇の実演家、さまざまな立場の現代芸術の関係者（演出家、批評家、支援組織スタッフなど）が協働して研究会・ワークショップをおこなうことで、①無形文化遺産指定後10年間の能・昆劇の動態研究、②古典演劇継承のための共通課題の整理、③現代演劇との交流による未来への可能性の検証、④実演家相互の技術交流と技術訓練方法の記録、データベース化などを目標としている。

【研究成果の概要】

平成23（2011）年度

平成23（2011）年度は研究初年度にあたるということもあり、本研究がどのような研究フレームで活動を進めていくかということが大きな焦点となった。この論議に入る前に、それぞれの伝統芸能についての理解を深める方法として、能・昆劇の研究者による基調講演をおこない、双方の実演家・研究者、そして現代演劇の関係者とともに知識の共有化がはかられた。これにより能・昆劇がそれぞれにかかえる問題を整理し、保存・発展につながる具体的な研究フレームの提案がなされた。

また、6月および11月に香港で開催されたシンポジウムでは、

【実演家団体】鉄仙会（日本）／江蘇省演芸集団昆劇院（南京）

【研究団体】早稲田大学演劇博物館（日本）／中国昆曲博物館（蘇州）

【政策提言団体】トーキョー・ワンダー・サイト、国際交流基金（日本）／進念・二十面體（香港）

が協働して、能と昆劇における人材育成、マネジメントなどの創造環境の視点から比較研究をおこなった。

さらに、6月（香港・南京・東京）、11月（香港）でのフォーラム開催と同時に能・昆劇・現代演劇の実演家の相互交流ワークショップを開催したほか、郭宝崑『靈戯』を題材に能と昆劇の実演家の協働作業として、創作試演をおこなった。公開ワークショップには実演家に加え、研究者がオブザーバーとして参加し、技術訓練方法の記録・データベース化にむけての始点となった。

平成24（2012）年度

平成23（2011）年度を通しておこなった研究会・ワークショップの成果をふまえ、平成24（2012）年度は日本側・中尾薫（大阪大学大学院、日本文学・能楽研究）、中国側・楊慧儀〔ジェシカ・ヤン〕（香港浸會大学、翻訳学・パフォーマンス・アート）を中心とする研究活動が進められ、その成果として10月にシンポジウム「能の体、昆劇の体」を開催した。シンポジウムのなかでは、鶴沢久（観世龍）、徐思佳、楊陽（江蘇省演芸集団昆劇院）といった能と昆劇それぞれの実演家によるデモンストレーションがおこなわれ、研究者が演技法と具体的に接することにより、相互の関連性と相違を考察する基礎的な視点を得ることから始まり、それぞれの伝統演劇が持つ空間性と、そのなかにおける身体の様式性を考察した。さらに、中尾薫、楊慧儀の両研究者によって、動作がもたらす美感、物語るという演劇的側面、意味を象徴するという側面から、それぞれの伝統演劇のもつ特性についても分析がなされ、研究の成果が報告された。来年度は今年度の研究を基盤として、さらに比較研究を進めていく予定である。全体討論においては、現代演劇の研究者、実演家も交えながら、双方の伝統演劇のもつ「空間性」、「文学的要素」についての問題提起がなされた。平成23、24（2011、2012）年度に開催された技術ワークショップ交流、研究交流では、その「身体性」を中心に調査と比較研究をおこなってきたが、来年度に向けてはあらためて「能」と「昆劇」という2つの伝統演劇のもつ「空間」と「ことば（テキスト）」についての新たな研究の拡がりへの取り組みが確認された。

また以上の研究テーマを踏まえて、平成23（2011）年度にひきつづき能・昆劇の演者の共演によるperformance『靈戯』（郭宝崑作）を製作し、東京、シンガポールで上演をおこなった。

シンポジウム翌日の研究会においては、今日の日中の文化状況に照らし合わせ、この研究プロジェクトが来年度どのように発展していく可能性があるのか、伝統演劇をめぐる後継者育成の問題、マネジメントの問題など、この研究を通して能と昆劇の継承保存と発展に貢献できるような課題についても次年度の研究テーマとして新たに設定された。

来年度は、研究フォーラムを開催して、三年間の研究成果のまとめをおこなうと同時に、広く成果を公開するシンポジウムの開催、および本研究成果（論文をふくむ）を総合的にまとめた冊子の発行をおこなう。また、研究過程、および内容をまとめた映像資料を作成する予定である。

テーマ研究 8

伎楽面の総合的研究及び復元模刻制作

研究代表者：籾内佐斗司（東京藝術大学大学院美術研究科文化財保存学専攻保存修復彫刻研究室教授）
研究分担者：仲裕次郎（東京藝術大学大学院美術研究科文化財保存学専攻保存修復彫刻研究室非常勤講師）
益田芳樹（東京藝術大学大学院美術研究科文化財保存学専攻保存修復彫刻研究室非常勤講師）、小沼祥子（東京藝術大学大学院・美術研究科文化財保存学専攻保存修復彫刻研究室教育研究助手）、藤曲隆哉（東京藝術大学大学院美術研究科文化財保存学専攻保存修復彫刻研究室博士課程）、鈴木篤（東京藝術大学大学院美術研究科文化財保存学専攻保存修復彫刻研究室教育研究助手）、白尾可奈子（東京藝術大学大学院美術研究科文化財保存学専攻保存修復彫刻研究室教育研究助手）

【研究目的】

伎楽は中国南方の呉からわが国に伝えられ、飛鳥、天平時代に盛んにおこなわれたが、次第に衰退していったために、いまだ解明されていない部分も少なくない。東大寺をはじめとして、法隆寺、正倉院、春日大社、叡福寺等には、伎楽に用いた伎楽面が今も数多く残されており、日本の演劇史を研究するにあたって不可欠だけでなく、後世のほかの仮面とは異なる特徴をもつなど、その独特の造形は日本彫刻史においても重要な位置を占める。現在東大寺に所蔵されている39面の伎楽面の総合的な調査研究をおこなうことで、制作当初の状態を目指した精巧な伎楽面の復元模造を試み、木彫技術や彩色技術といった制作技法の解明を目指す。

【研究成果の概要】

平成23（2011）年度

平成23（2011）年度の研究においては、正倉院蔵・伎楽面「崑崙」の写真測量、等高線図といった既存資料を用いて、推定される当時と同じ材料、技法によって実際に当初の姿を再現したことが大きな成果である。なぜなら、調査で導き出した推論が、制作という実技を通じて確信へと変わることこそが、本研究のテーマである総合的研究の本質だからである。制作作業においては、1972年発行の『正倉院の伎楽面』に掲載されている等高線による測量図（正面、右面、左面）を参考にした。しかし、これらの図は模刻に必要な木取りの向きとは異なるため、この等高線図を用いつつも、コンピュータ上で3Dモデル化をおこない、目的に沿った図面の制作を試みた。3D化の手法としては、まず断面図をPC上でトレースすることによって、ラスター情報をベクター化し、その後、断面線のそれぞれの線に対して高さ情報を与え（線間2.5mm）、メッシュ化することで、正面、右面、左面三種類の3Dモデルを作成した。さらに、これらのデータを統合することによって、一体化した3Dモデルを作成した。上記の作業によって、伎楽面「崑崙」を任意の視点で表示することが可能となり、木取りに必要な図面を作成できた。

また、公開されている報告書では、頭頂部、顎部の部分に木芯が通っていると記述されているため、桐の丸太から木取りを確定させ、実際に彫り進めた。その際、デジタルデータを参照して、必要に応じた寸法や図を用いることで、効率良く彫刻作業を進めることが可能となった。一方、実物では欠損してしまっている部分についても、制作当初の復元を目指して、形状を修復、さらに髪、顎髭を張毛、眉毛、口髭を植毛した。

彫刻作業のあとは、全体に黒漆を施し、白土を塗り、その上に顔料を塗っていく。下地については、かねてからの検討事項であった黒漆の上に松煙を蒔く下地作業をおこなったが、その上に塗る

白土の定着が思いのほかよくなかったため、最終的には従来通り錆漆を刷り込んだあと、白土を塗った。この点は今後の課題とし、さらなる研究を続けたい。

これまでも復元した伎楽面の事例は多く見られるものの、本研究の大きな特色としては、既存の断面図といった資料から3Dモデル化したことである。このことによって模刻の幅は大きく広がることとなった。今後の伎楽面の模刻においても適用できる手法であり、ひとつのケーススタディとしてもたいへん貴重なものであるといえよう。

平成24（2012）年度

東京国立博物館所蔵法隆寺献納呉公面の熟覧、および3Dデータ計測調査を実施し、構造や表面塗膜層の調査をおこなった。本調査で、正確な形状のデータや、木取り方法、また表面仕上げに関して興味深い観察結果が得られた。以下に概要を記す。

木取り：木目の様子から、木裏を正面彫られていると判断した。
彩色下地：漆層は認められない
表面仕上げ：研がれたような跡がある（やすりの様なものか）
宝冠：左右非対称であるとされるが、意図的なものなのか、恣意的なものかの判断が難しい。

調査から得た情報や、先行研究をもとに、総合的な復元をおこなう。本体は実際に樟材から彫刻し、木取り、荒彫り、内削、小造り、を終え、仕上げの段階にある。また、亡失した後頭部は同一群の獅子児を参考に復元をおこなっている。塗膜は、樟材でテストピースを作成し、彩色との相性や、下地（目どめ）の技法、下記3例を検証中である。

- ①木地を研がずに刃物で仕上げ、鉛白を摺り込むように重ね、彩色
- ②木地を研いで、研ぎ粉で目どめを行った上に、鉛白下地＋彩色
- ③木地を研いで、研ぎ粉で目どめを行った上に、漆で木地固め＋彩色鉛白下地＋彩色

宝冠は、取得した3Dデータを利用して、樹脂を切削して実寸代の模型を作成。その宝冠模型の表面に紙を貼付け、平面図を描きおこした。左右の対応する欠失部は反転させる形で補い、ほぼ左右対称の想定復元図面を作成した。

法隆寺金堂の四天王像との面相比較し、以前から指摘される彫刻の成熟と呼ばれる、造型の変化、以下3点を具体的に検証した。

- ①頬の膨らみ、二重あご
- ②目元や口元の奥行き、彫り込みの深さ（眼球の丸さ等が意識されている）
- ③鼻から口元にかけてのつながり

公募研究
2011

1

20世紀前半期における日本の記録映画受容全史

研究代表者: 奥村賢 (いわき明星大学人文学部表現文化学科教授)

研究分担者: 川村健一郎 (立命館大学映像学部准教授)、佐崎順昭 (東京国立近代美術館フィルムセンター客員研究員)、濱田尚孝 (日本映画大学図書館職員)

日本の映画研究において、記録映画はいまだ研究調査が不十分な分野である。劇映画に勝るとも劣らない本数が生み出されてきたにもかかわらず、体系的な研究がなかなか進展してこなかったのが実情である。本研究の目的は、学術領域において軽視されがちな記録映画に適正な照明をあてることによって、映画研究におけるこの不均衡を少しでも解消し、最終的に映画研究全体を前進させることにある。

演劇映像学連携研究拠点における2010年度の共同研究では、1930年代から40年代の時期に焦点をあて、日本記録映画史における受容の流れについて調査をおこなったが、このとき受容史の全体像を把握するには、設定範囲内の考察だけではきわめて不十分であることがあきらかとなった。2011年度は時期を含め、考察対象をさらに広げ、日本における記録映画の受容について、より正確な歴史的な位置づけをおこなおうとした。以下、2011年度の研究成果について略記する。

(1) 1920年代ドイツの代表的映画専門誌「Film-Kurier」を中心に、ヴァルター・ルトマン関連の記事を精査し、日本とルトマンを関連させた記事が見当たらないことから、ドイツでは

日本映画とルトマン作品との関係についてはほとんど知られていないことが判明した。一方で未公開フィルムの調査によって、ルトマン映画の全体的特徴は把握することができた。

- (2) ドイツでのフィルム調査で、戦時中のニュース映画『日本ニュース』のタイトルバック画面は『ドイツ週間ニュース』以前のドイツのニュース映画の影響を受けていないこと、『日本ニュース』(第88号の2)に影響をあたえたと考えられる『ドイツ週間ニュース』は561号であることが確認できた。
- (3) 戦前から戦後にかけて映画評論の技術分野で活躍した島崎清彦の遺贈資料を調査し、彼がアマチュア映画や小型映画、映画技術史の専門的な資料を多く保存していたことを確認できたことから、記録映画製作過程における技術史の側面も検証できる可能性を見出した。
- (4) 戦時中の観客動向、国策的観客動員の傾向について文献調査を進めたが、記録映画に焦点化するためには、戦前から戦後にかけての「教育映画」のあり方を検討する必要があることが判明した。

公募研究
2011

2

坪内逍遙遺文の網羅的収集調査と紹介に関する研究

研究代表者: 松山薫 (早稲田大学戸山図書館専任職員)

研究分担者: 菊池明 (演劇博物館招聘研究員)、梅澤宣夫 (早稲田中学高等学校教諭)、濱口久仁子 (演劇博物館招聘研究員)、林京平 (逍遙協会理事)

(1) 逍遙自筆書簡の原本調査・翻刻・解説他

- ・逍遙書簡2052通の原本調査を実施し、翻刻・解説を終了した。財団法人逍遙協会では、長年坪内逍遙の書簡を収集し調査を続けてきたが、当研究会ではその中から早稲田大学(図書館・演劇博物館・大学史資料センター)と逍遙協会所蔵の計2052通を今回の調査対象とし、翻刻・解説を終えた。書簡の宛先は110名に及び、内容は非常に多彩で、逍遙の作品執筆の意図や創作過程、門下生との交流、シェイクスピア翻訳に向ける情熱、事業実施に向け用意周到な緻密さ等を読み取ることが出来、初出資料が多いため貴重である。坪内逍遙研究、また近代演劇史研究の上でも意義のある資料である。2011年度末現在刊行のための編集作業が進行中である。
- ・今回の研究では、書簡文の翻刻にとどまらず、宛先の人物の経歴業績、逍遙との関係を調査し、1通ごとの書簡の背景を探りながら詳細な解説を付した。

- ・当初の予定には無かったが、追加研究として雑誌『芸術殿』掲載書簡(293通)を新たに加えた。現在原本の所蔵が不明のものも含まれるが、逍遙逝去直後の収録であり、当時の所蔵者(宛先人本人)による解説も含まれるため、多少の重複はあるが、解説を付記した。また、演劇博物館新収蔵の47通も研究対象として新たに加えた。

・総調査書簡数は2392通となった。

- (2) 演劇博物館・逍遙協会所蔵逍遙関係写真(逍遙肖像・集合写真・著書・関連写真・一部書簡絵葉書)約1000件のデジタル化
- ・上記資料のデジタル化が完了し、その中の一部は逍遙書簡展展示用写真として使用された。また今後刊行予定の『坪内逍遙新集』(『逍遙書簡集』『逍遙日記』『逍遙書誌』)の図版にも活用され、『坪内逍遙新集』完成後は、デジタルデータは演劇博物館で利用される予定。

公募研究
2011
3

日本映画における〈国家〉の表象と文化的〈公共性〉の構築に関する学際的研究

研究代表者：山本佐恵（日本大学芸術学部非常勤講師）

研究分担者：畑中朋子（拓殖大学工学部准教授）、松谷容作（神戸大学大学院人文学研究科学術推進研究員）、畑あゆみ（山形ドキュメンタリー映画祭事務局職員）、溝渕久美子（中部大学非常勤講師）、洞ヶ瀬真人（ハーバード大学イエンチン研究所客員研究員）、土山陽子（フランス社会科学高等研究院芸術・言語研究所博士課程）

①フランス社会科学高等研究院（CRAL-EHESS）との共同シンポジウム“Le Japon d'après-guerre à travers ses films, de 1945 à nos jours”「映像に見る戦後の日本社会 1945年から現在まで」（2011年12月9日、於・パリ日本文化会館）

第1部では、「戦後の復興と冷戦下の核の脅威」をテーマに、ドキュメンタリー、あるいはフィクションを通して描かれた原爆の記憶と核の存在について検討した。第2部では、高度経済成長期における日本独自の文化的発展を、視覚メディアの多様性とともに辿った。第3部では、報道映像も含めた現代日本におけるメディア体験を考察し、全体討議を行った。本チームからは土山陽子、松谷容作、増田展大が研究発表を行い、海外の研究者と活発な議論を行った。また、港千尋氏（多摩美術大学教授）に、写真・美術作品における広島への記憶とその再建のプロセスについて基調講演をしていただいた。

その他、ジャン＝マリー・シェフェール、クロード・エステーブ、アンドレ・ギュンテール（以上EHESS）、ミカエル・リュケン、バーバラ・モーテス（以上INALCO）、グザビエ・マルテル（フランス国立美術館連合RMN）の各氏が参加した。

②公開研究会「映画＝表象の政治性」（2012年1月28日、於・

立命館大学）

本研究会は、研究分担者が1年間の研究成果を公表し、議論を深めることを目的としている。本チーム外から三名の招聘講師を迎え、研究発表と全体討議を行った。

第1部では、「日本映画の政治学」をパネル・テーマとし、山本佐恵「戦時下の文化宣伝における「国家」の表象」、池川玲子（実践女子大学・非常勤講師）「『満洲』移民プロパガンダとジェンダー——坂根田鶴子監督『開拓の花嫁』を中心として」、洞ヶ瀬真人「監督者の創生——映画の生産と消費を担う監督像」、溝渕久美子「映画法下における原作・シナリオの懸賞制度と映画の公共性」の研究発表が行われた。第2部では、「歴史・理論・表象」をパネル・テーマに、土山陽子「映画と歴史叙述：第二次世界大戦の記録映像から」、岡本源太「アビ・ヴァールブルクと映画の想像力の政治学」、篠木涼「情動の測定から操作へ——ウィリアム・M・マーストンによる嘘発見器と映画の心理学をめぐる批判的考察」の研究発表が行われた。第3部では、映画、美術、雑誌メディア、文学、心理学を視座におきながら、「国家」の表象形成とその流通について全員で討議した。

公募研究
2011
4

明治・大正期の歌舞伎興行と狂言作者の周辺について

研究代表者：神田由築（お茶の水女子大学大学院人間文化創成科学研究科准教授）

研究分担者：佐藤かつら（鶴見大学文学部准教授）、木村涼（早稲田大学演劇博物館助手）、中村緑（東京大学大学院人文社会系研究科博士課程）、磯部孝明（総合研究大学院大学博士後期課程）

本研究は、これに先立つ共同研究（2009年度「狂言作者竹柴其水興行関係資料の基礎的研究と翻刻作業」、2010年度「明治・大正期の歌舞伎狂言作者および興行関係資料の研究」）の成果をふまえ、引き続き明治・大正期の狂言作者である竹柴其水（1847-1923）関係資料群の内容の包括的な把握に努めること、および、それらの資料を用いて明治・大正期の興行の様相を明らかにするとともに、其水または同時代の作者による作品や周辺事情の研究を進めることを目的として、以下の方法で進めてきた。①竹柴其水関係資料（早稲田大学演劇博物館所蔵）の仮目録を作成して資料群の全容の把握に努める。②それらの資料群を用いて1カ月に1回のペースで研究発表会を行い、明治・大正期の興行についての研究を深化させる。③研究成果を学会や学会誌で報告する。

その結果、以下の研究成果を得た。第一に、竹柴其水関係資料の仮目録の作成を完了した。この資料群はおおよそ以下のように分類できる。①其水作の作品を作成・上演するための資料、②

其水作以外の作品を上演するための資料、③引札、④「脚本届」などの書類、⑤日記等私的な資料。これはすなわち、明治・大正期の狂言作者の仕事の内容分類にも通じる。第二に、竹柴其水の出勤年譜および作品の年譜を作成して（佐藤による）、其水の基本的な活動データを整えた。第三に、資料群の資料を1人1点ずつ用いて具体的な研究報告を行い、研究の深化を目指した。選定された作品は「日本晴露領雪解」、「皐月晴上野朝風」、「千石船帆影白浜」。また、雑誌『歌舞伎』に掲載された其水作品の劇評を中心とした研究報告も行われた。資料群のうち、近世期の芝居茶屋の金銭帳簿である「芝居書付」は、やや異質な資料であるが、茶屋研究の上で注目すべき資料として史学会で紹介した。

本研究は、竹柴其水関係資料を用いた初めての本格的な研究であり、これによって、河竹黙阿弥以後の狂言作者についての、本格的な研究が着手されたといえる。これを機に今後、明治・大正期の興行史および狂言作者の研究が進むことが期待される。

公募研究 2011 5

帝政期ロシア映画関連資料の多角的研究

研究代表者：大傍正規（早稲田大学演劇博物館グローバルCOE研究助手）

研究分担者：八木君人（山形大学日本学術振興会特別研究員PD）、河村彩（早稲田大学教育総合科学学術院助手）

本研究の目的は、早稲田大学演劇博物館が所蔵する帝政期ロシアで発行された映画雑誌群と、21世紀COEが購入し、演劇博物館に移管された映像資料を共同で研究する事を通じて、「帝政期ロシアにおける初期映画興行」の全体像を明らかにすることにある。

まずは帝政期ロシア映画上映会（小川佐和子の解説、第1回研究会）を開催して、帝政期ロシア映画について知識の共有をはかり、その後、デジタル化した映画雑誌群の調査・分析に各自が取り組んだ。次に「基本文献リスト」を作成し（フォードロワ・アナスタシア「帝政期ロシア映画研究の基本文献リスト作成に向けて」、第2回研究会）、日本国内では所蔵機関の無かった『映画学紀要 Киноведческие записки』の1-25号を入手することで、研究基盤を整備した。これらの共同研究を通じて最終的に明らかにされたのは、以下の点である。

第一次世界大戦以前に世界各国の映画市場を席巻していたのは、主としてフランスのパテ社やゴモモン社が製作した喜劇映画や文芸映画であった。この二大映画ジャンルが世界各国の映画製

作の礎を築いてきたことは、これまでも知られて来たが、当時の映画雑誌の残存率は極めて低く、その変容過程が詳細なデータを裏付けとして示されたことはなかった。そこで我々は、約50種と残存率の高い帝政期ロシアの映画雑誌群に掲載されている作品データを分析することで、帝政期ロシアにおいても初期フランス映画が主要な位置を占めており、それらが帝政期ロシア映画の変容に大きな役割を果たしていたことを明らかにした（帝政期ロシアで公開された初期フランス映画のタイトルや、映画雑誌『シネフォノ』（1907-8）の目次をリスト化した索引データベースを作成した）。

さらに、大傍と河村が行ったモスクワ出張では、現地に滞在していた八木、フォードロワ・アナスタシアらと共に「ロシアにおける帝政期ロシア映画研究の現状」というテーマで、ロシアを代表する映画研究者ナターリア・ヌシーノワ全ロシア映画大学映画研究所教授にインタビューを行った。その成果は「基本文献リスト」と共に、演劇博物館紀要『演劇研究』に投稿予定である。

公募研究 2011 6

河竹黙阿弥の作品研究

研究代表者：岩井眞實（福岡女学院大学表現学科教授）

研究分担者：今岡謙太郎（武蔵野美術大学教養文化研究室教授）、埋忠美沙（早稲田大学文化構想学部非常勤講師）、金子健（文化庁文化財部伝統文化課文部科学技官）、倉橋正恵（同志社女子大学文学部非常勤講師）、寺田志麻（早稲田大学オープン教育センター非常勤講師）、日置貴之（東京大学大学院博士課程）

本研究の目的は、幕末から明治に活躍した歌舞伎作者・河竹黙阿弥の作品研究である。黙阿弥の生誕200年を目前に控えた今、黙阿弥研究のさらなる発展を促すために、昨年度から拠点において「黙阿弥研究会」を発足し、黙阿弥作品の資料調査と作品分析をおこなう共同研究を開始した。本年度の研究成果は、以下の通りである。

- ①資料（写本、正本写、番付）の調査と作品研究をおこなった。本年度は以下6作を対象とし、研究会で討論をおこなった。対象とした作品は以下の通り。「桜清水清玄」（文政13年）、「音菊家化物」（天保9年）、「都鳥廓白浪」（嘉永7年）、「けいせい面影桜」（文久3年）、「善悪両面兎手柏」（慶応3年）、「西洋囃日本写絵」（明治19年）。
- ②上記の作品の中から、台本2作（「桜清水清玄」「都鳥廓白浪」）と正本写2作（「音菊家化物」「都鳥廓白浪」）の翻刻をおこなった。このうち「都鳥廓白浪」は黙阿弥の初期の代表作で現在も上演される演目だが、これまで部分的な翻刻しかなく作品の全

貌は知られていなかった。そこで未翻刻台本（演劇博物館所蔵）3幕と、台本に未収録の場面を収録する正本写（興行に取材した絵本）の翻刻をおこない、作品の全貌を詳らかにした。併せて原作である「桜清水清玄」（二代目勝俣蔵作）の台本（松竹大谷図書館所蔵）の翻刻もおこない、二作を比較することで黙阿弥の作劇法を分析した。これらの成果は、国立劇場調査養成部刊『桜清水清玄・都鳥廓白浪〔未翻刻戯曲集18〕』『都鳥汀松若〔正本写合巻集8〕』『御家のばけもの〔正本写合巻集9〕』に収録し、広く一般に公開した。

- ③日本芸術文化振興会のwebサイト「文化デジタルライブラリー 舞台芸術教材」のうち、「黙阿弥」（<http://www2.ntj.jac.go.jp/dglib/>）について、項目選定と原稿執筆をおこなった。本サイトは多くの歌舞伎ファンの目に触れるものであり、研究会で取り組んでいる黙阿弥研究の最新の成果を広く一般に公開することができた。

公募研究
2011
7

戦後映像文化史におけるオルタナティブ的实践について の実証的研究—— 幻灯／スライドメディアの再評価及び 映画・演劇界との連携の実態の検証を中心に——

研究代表者：鷺谷花（早稲田大学演劇博物館招聘研究員）

研究分担者：岡田秀則（東京国立近代美術館フィルムセンター主任研究員）、紙屋牧子（早稲田大学演劇博物館招聘研究員）、坂尻昌平（日本大学芸術学部非常勤講師）、土居安子（大阪国際児童文学館主任専門員）、Robert Tierney（イリノイ大学東アジア研究所准教授）、安井喜雄（神戸映画資料館館長）、吉原ゆかり（筑波大学人文社会科学部研究科准教授）、中野正昭（早稲田大学演劇博物館招聘研究員）、李正旭（筑波大学人文社会科学部研究科博士課程）

大阪国際児童文学館にて、占領期から1970年代にかけて製作された、主に学校・社会教育に関連する幻灯フィルム及び台本を2000点弱、神戸映画資料館にて1950年代から60年代にかけて製作された社会・労働運動に関連する幻灯フィルム及び台本を約300点発見し、内容の精査及びカタログ化作業を進めた。大阪国際児童文学館で発見した幻灯フィルムのうちには、東映映画『レ・ミゼラブル』の幻灯版、長谷川町子『サザエさん』のオリジナル幻灯版、神戸映画資料館で発見した幻灯フィルムのうちには、東大セツルメントこども会製作・加古里子構成『ぼくのかあちゃん』（1953）、奥多摩山村工作隊製作『山はおれたちのものだ』（1953?）、前進座製作『美女カンテメ』『憂国の詩人 屈原』（1952）など、戦後の社会運動の記録としても貴重な資料が多数含まれていることを確認した。

神戸映画資料館所蔵幻灯資料のうち、幻灯機による上映の可能なフィルムを選定して、早稲田大学、エル・おおさか、山形国際ドキュメンタリー映画祭において上映会を開催した。山形国際ド

キュメンタリー映画祭「やまがたと映画」のプログラムとして企画された「幻灯の季節2 よみがえる昭和の幻灯」（2011年10月9日）では、活動弁士片岡一郎氏による口演を得て、幻灯及び「幻灯会」の独自の魅力を国際的な場で再発見する貴重な機会となった。

発見した幻灯フィルム資料の多くは経年劣化しており、また、可燃性フィルムも含まれていることが判明したため、デジタルデータ化を進めると共に、フィルムとしての復元・保存を試み、最良の形で保管方法の検討を進めている。2012年1月12日に早稲田大学内にて上映と研究報告会「《幻灯》に見る戦後社会運動——基地と原爆——」を開催、アナログ復元した幻灯版『原爆の図』を含む4本の幻灯フィルムを上映し、併せて文学、美術、映画など各分野の専門家4名による研究報告を行った。

2011年度の調査・研究成果については、論文「昭和期日本における幻灯の復興——戦後社会運動のメディアとしての発展を中心に——」（鷺谷花）にまとめ、『映像学』第87号（2011年11月）に投稿・掲載された。

公募研究
2011
8

近代日露演劇交流屠蘇の文脈

研究代表者：上田洋子（早稲田大学文学学術院非常勤講師）

研究分担者：永田靖（大阪大学大学院文学研究科教授）、藤井慎太郎（早稲田大学文学学術院教授）、粕谷紀子（早稲田大学文学学術院非常勤講師）、内田健介（千葉大学大学院人文社会科学部研究科修了）、伊藤倫（一橋大学大学院博士後期課程日本学術振興会研究員DC）、斎藤慶子（早稲田大学文学学術院博士後期課程）

本研究は20世紀前半における日露演劇交流が近現代の演劇史上で果たした役割を再考するものである。早稲田大学演劇博物館には1928年の歌舞伎ソ連公演の貼込帳、野崎韶夫や岡田嘉子の収集品他、日露演劇交流を証言する資料が多く所蔵されており、未整理のものも少なくない。これらを整理し、日露および世界の研究者の研究に供して研究交流の場を設けていくことを目指す。今年度は1928年歌舞伎ソ連公演に関する調査・研究を中心に据え、貼込帳記事をすべて翻訳し、日本演劇研究者と共同でその歴史的意義を考える機会を持った。

1928年歌舞伎ソ連公演貼込帳記事に関しては、収録記事をリスト化し、ロシア演劇・文学研究者で分担して全訳をする体制を設けた。7名の研究者が分担して夏に翻訳作業を開始、年度内に7割程度の翻訳を終えることができた。また、演劇博物館、早稲田大学図書館、およびモスクワ、サンクトペテルブルグのアーカイヴで調査を行い、不足分の記事などを補い、適宜翻訳を行った。また、合計6回の研究会を開催、歌舞伎ソ連公演貼込帳を用い

た研究の可能性について討議を重ねた。ロシアにおける資料に関しては研究協力者のロシア科学アカデミー文学研究所上級研究員マリヤ・マリコワ氏に歌舞伎ソ連公演と新聞・雑誌メディアに関する調査・資料提供・論考の執筆をいただいた。

2012年1月21日にはこれらの研究を土台として研究分担者・協力者に加えて日露映画研究の岩本憲児教授を迎えてシンポジウム「演博コレクション・1928年歌舞伎ソ連公演貼り込み帳と日露演劇交流研究の可能性」を開催。貼込帳を新たな翻訳とともに紹介し、歌舞伎とロシア演劇・映画の研究者・演劇批評家による研究成果を踏まえた討論を行った。さらに、マリコワ氏による、同時代ソ連の文脈における歌舞伎公演の位置づけに関するペーパー発表および若手研究者による日露演劇交流をテーマとする研究発表がなされた。

貼込帳の他に、未整理であった演博所蔵野崎韶夫旧蔵ロシア演劇資料の整理に着手し、バレエ関連写真と書簡などの資料をスキャンした。

公募研究
2011
9

『鴻池幸武・武智鉄二関係資料』の公開に向けた研究・調査

研究代表者：児玉竜一（早稲田大学文学学術院教授）

研究分担者：桜井弘（国立劇場調査養成部資料サービス課課長）、坂本清恵（日本女子大学文学部教授）、川口節子（目白大学短期大学部非常勤講師）、瀧田裕介（国立文楽劇場企画制作課企画制作係）、内山美樹子（早稲田大学演劇博物館名誉教授）、小島智章（早稲田大学文学学術院博士課程）、金昭賢（早稲田大学文学学術院博士課程）、原田真澄（早稲田大学演劇博物館グローバルCOE研究助手）

「鴻池幸武・武智鉄二関係資料」と仮に名付けた資料群を、整理・紹介することを目的として、演習形式、合宿形式などによって、資料の読解と整理を行った。

同資料は、前年度に演劇博物館が古書肆より購入したもので、吉田幸三郎の旧蔵にかかる。大きく分類して、(1) 書簡類、(2) 写真類、(3) 草稿・目録類、(4) パンフレット等、などに分けられるが、なかでも特筆されるのは、豊竹古鞠太夫から鴻池幸武に宛てた書簡と、豊竹古鞠太夫の旧蔵書目録である。

本プロジェクトでは、とくに書簡の全翻刻と略注を公開することを最優先課題として、『演劇研究』誌上でこれを発表した。鴻池幸武が鴻池家をバックとした独自の立場で、古鞠太夫と年齢差を離れた親密な交友をもっていたこと、その交友を通して浄瑠璃史上の様々な事象について古鞠太夫に意見を糺し、古鞠太夫もまたこれに答えて、みずからの蘊奥をあますところなく分かち与えている有様が、如実に読み取れる書簡群であることがわかった。これまでに、これほどまとまった数の古鞠太夫書簡が一挙に紹介されたことはなく、近代文楽において最も重要な太夫である豊竹古鞠太

夫の伝記的側面、および学術的側面に多大な新知見をもたらすことができた。また、鴻池幸武の文章表現に、古鞠太夫が添削を加えている事例もあり、演者と批評家（論者）の距離と関係を考える上でも、興味深い内容を持っていることも、あわせて確認できた。

旧蔵書目録については、これまでまったく内容を知ることのできなかった古鞠太夫の戦前の蔵書（戦災ですべて焼失）の、書目だけでもとりあえず判明する重要な資料であると判明した。ただし、さらに踏み込んで、いずれの書誌から刊行された版本であるかといったレベルまでを要求することは、現時点ではできず、分担者の一人である小島智章が研究発表を行い、概略を紹介したが、別途収集の新資料とあわせて、論文文化をめざすこととなった。

その他、パンフレット類のなかにも、初公開となる「創造劇場」パンフレットがあり、これは鴻池幸武と武智鉄二の共同演出で、武智鉄二にとっては初めての演出作品であった。これに関しても大きな新知見をもたらすことができた。

公募研究
2011
10

無声映画のフィルムとテキストの対照にもとづく相互的の同定研究

研究代表者：上田学（早稲田大学演劇博物館助手）

研究分担者：板倉史明（東京国立近代美術館フィルムセンター主任研究員）、今田健太郎（大手前大学メディア芸術学部非常勤講師）、碓井みちこ（関東学院大学文学部専任講師）、大久保遼（東京大学大学院学際情報学府博士課程）、土田牧子（日本学術振興会特別研究員PD）、横田洋（大阪大学総合学術博物館助教）

本研究は、演劇博物館が所蔵する無声映画のフィルムと、新派資料を中心とするテキストを、映画学、演劇学双方の研究者が相互的に調査研究することで、その新たな学術的位置づけを模索することにある。具体的に本研究の対象となるのは、中村歌扇出演映画、および連鎖劇に関連する新派資料である。

(A) 第1回研究会において、中村歌扇が出演する映画『先代萩』（東京国立近代美術館所蔵）、および無声映画に音声を加えた「活弁トーキー版」（『元祖 大曲藝連鎖 東京江川巡業部』他）の試写を通じた調査を、東京国立近代美術館フィルムセンターで実施した。あわせて横田洋（研究分担者）による、歌扇出演の映画および連鎖劇に関する実証的な研究成果の発表がおこなわれ、研究者間で研究課題を明確にした。

(B) 第2回研究会において、土田牧子（研究分担者）が演劇史における中村歌扇の位置づけに関する研究発表をおこなった。そのうえで、(A) で実施の調査成果や、横田による収集資料を用いて、中村歌扇出演が見込まれる映画『朝顔日記』（早稲

田大学演劇博物館所蔵）との対照調査を実施した。また、新派の藤澤浅二郎、伊井蓉峰、井上正夫の関連資料（同所蔵）について共同調査をおこない、それらの成果の一部を企画展「日活向島と新派映画の時代展」（2011年12月～2012年3月）に反映させた。

(C) 第3回研究会において、新派劇で下座音楽を担当した四代目中村兵藏旧蔵資料（早稲田大学演劇博物館所蔵）に関し、兵藏の孫で囃子方の堅田喜三代氏を招聘し、共同調査を実施した。また調査後に、新派の特質と、映像文化、とりわけ無声映画音楽との関係性について、堅田氏を交えて、映画学、演劇学双方の研究者から意見交換がおこなわれた。

(D) 連鎖劇に関して、松竹キネマ等で活躍した女優、五月信子の実演資料のデータベース（計237件）を作成した。

(E) 無声映画のコンテキストに関して、2010年度の公募研究で作成した、演劇博物館所蔵弁士番付データベース（計1226件）に、新たに肖像写真の静止画（計134件）を組み込んだ。

公募研究
2011
11

日本における近代音源資料アーカイブ——蠟管以降の特殊音源を中心として——

研究代表者：飯島満（東京文化財研究所無形文化遺産部音声映像記録研究室長）

研究分担者：宮田繁幸（東京文化財研究所無形文化遺産部部長）、中山俊介（東京文化財研究所保存修復科学センター近代文化遺産研究室長）、大西秀紀（立命館大学文学部非常勤講師）、櫻井弘（独立行政法人日本芸術文化振興会国立文楽劇場企画制作課長）、柳知明（大阪芸術大学博物館事務長）、八日市屋典之（金沢蓄音機館館長）、永井美和子（早稲田大学演劇博物館）

2009年度より調査を継続しているフィルモン音帯（『無形文化遺産研究報告』第5号に調査結果を報告）については、経年劣化やそれにとまなう変形、あるいは断裂によって再生不能と考えられていた演劇博物館所蔵音帯を、東京文化財研究所保存修復センターの中山が中心となって修復。その一部は演劇博物館所蔵の再生機（確認した限りにおいて公的機関では唯一動態保存されている）での再生にも成功し、収録内容をデジタル化することができた。修復に至る経緯は、中山が第24回近代の文化遺産の保存修復に関する研究会「音声・映像記録メディアの保存と修復」で言及し、『保存科学』第51号に修復手法の詳細を報告。更に、懸案であった国立国会図書館所蔵フィルモン音帯の現物確認調査を行った。国会図書館でのみ現存が確認されている資料の一部についても、演博所蔵再生機によるデジタル化を実施。今後も継続して3機関で共同の調査を行う予定である。

今年度からは、新たに金沢蓄音機館ならびに大阪芸術大学が所蔵する出張録音盤と長時間レコードにも調査を広げ、東京文化

財研究所に移送し、再生と音声収録を試みる予定であったが、震災の発生とその影響により資料搬送等に不安が生じた事もあり、この方法は断念せざるをえなかった。

そこで代替案として、出張録音盤については、主として飯島・永井が担当し、まず東京文化財研究所が所蔵するフランス・パテ社製SP（1911年吹込み）の悉皆調査を行い、所蔵一覧を作成。さらに音声再生可能な専用機材をレンタルし、現在までに14枚28面の音声デジタル化した。この調査研究の詳細は『無形文化遺産研究報告』第6号に掲載した。

長時間レコードについては、主として大西が担当。東京文化財研究所が所蔵するニットー長時間レコード（収録時間は片面で通常の10インチSPの約3倍）のうち7枚を、先年のGCOEで成果をあげた義太夫レコード復元の技術に応用し、再生音をデジタル化。その一部を『日本音楽伝統センター所報』第12号で報告。更に京都市立大学日本音楽伝統センター主催の「日本の希少音楽にふれる」の12月のセミナーで発表・公開した。

公募研究
2012
1

幻燈種板及び機器の画像データ作製調査

研究代表者：藤岡幹嗣（立命館大学映像学部准教授）

研究分担者：池田光恵（大阪芸術大学芸術計画学科教授）、松本夏樹（武蔵野美術大学、大阪芸術大学非常勤講師）

初めて日本に幻燈が渡来したことを文献的に確認できる記録・安永八年（1779）刊行の『天狗通』によれば、幻燈見世物「影絵眼鏡」が大坂で演じられていたとされ、これはやがて日本独自の改良を経て、幻燈興行「写し絵」（江戸）「錦影絵」（大坂）となり、明治には多くの常打小屋が出来るほど盛んであった。明治初期に再渡来した西洋幻燈も大に普及し、家庭でも享受されるようになっていく。明治29～30年に映画が初公開されて以後、映画の巡業や常設興行と共に、家庭用映像機器の改良・販路拡大もあり、幻燈と初期映画の日本的受容と進化は渾然一体となっていた。その背景には、欧米の技術をよく理解し、さらに豊かに発展させる日本独自の文化的素地が存在したのであり、この幻燈及び初期映画の受容形態もこの素地のひとつであるといえよう。

江戸・明治期から昭和初期にいたる幻燈とその種板を中心とする、本研究分担者・松本夏樹が管理および所蔵する初期映像機器類の画像データ作製の為に、各品目の内容調査研究・画像撮影・電子データ化を進めた。

その際、各品目特に破損しやすいガラス製種板や、経年劣化した機器類の扱いに習熟した研究者および研究補助者、撮影者、データベース製作者を必要不可欠とするが、本研究代表者・藤岡幹嗣と本研究分担者・池田光恵、松本夏樹は、大阪芸術大学藝

術研究所2003年度「玩具映画及び映画復元・調査・研究プロジェクト」において大阪歴史博物館所蔵の錦影絵風呂呂（木製幻燈機）及び種板一式の復元作業と調査研究の実績を有している。本研究分担者・池田光恵は、錦影絵の復元・上演を大阪芸術大学で研究・指導しており、本研究分担者・松本夏樹は家庭用及び興行用初期映像機器を約40年にわたり収集研究し、かつ可能なものにより大学・博物館等で実物上映することでその使用技術の実践研究を行っている。また研究補助者、撮影者、電子データ化製作者のいずれもが、以前から松本夏樹の調査研究に従事した経験を有するものがこれを担当した。

この調査作業の工程それ自体を撮影・記録するとともに、使用可能もしくは復元可能な種板を含む映像機器を使って実際に当時の映写実態を再現し、これをビデオ記録化して各品目のデータベース化のみならず、機器操作の動態研究にも資する事ができた。

機器の画像とその文化的背景と共に、次世代に日本映像史の動態的研究の実際とその将来的な保存技術や文化継承への関心を喚起する重要な教育ツールとしての映像記録を残すことができた。調査法・保存技術・復元過程・動態研究記録の各項目を満たす成果が得られたことは、本研究の最も重要な成果のひとつである。

公募研究 2012 2

日本記録映画の生成と興隆～受容史的視点からの考察～

研究代表者：奥村賢（いわき明星大学人文学部表現文化学科教授）

研究分担者：川村健一郎（立命館大学映像学部准教授）、佐崎順昭（東京国立近代美術館フィルムセンター客員研究員）、濱田尚孝（日本映画大学図書館職員）、堤龍一郎（目白大学非常勤講師）

(1) 戦前の日本の記録映画の飛躍的發展には、外国の記録映画が大きく影響している。前年度、調査をおこなったドイツの記録映画だけでなく、20年代のアメリカの長編記録映画、20年代から30年代にかけての旧ソ連の映画理論とドキュメンタリーなども少なからず関与している。本年度の研究では、調査が未完了の分野、30年代から40年代のイギリス・ドキュメンタリー映画との関係に焦点をあて調査を進めた。日本では一般に、イギリス・ドキュメンタリーの場合、理論は紹介されたが、作品は同時代に輸入、公開されなかったとされている。しかしこれは誤りで、実際には上映され、反響もあった。この背景には、当時の資料がほとんど残存せず、その実態が不明だったことがある。今回の調査では、イギリスに赴き、輸入から上映までの過程と作品内容に関する資料を探索し、その不明な部分をあきらかにしようとした。その結果、駐日大使館の外交記録に日本の外務省との文化映画に関するわずかな交信記録を発見したが、詳細な記録は残されていないことが判明した。一方、当時上映された作品については、その基本データや内容の詳細を確認できる資料は確保することができた。

(2) 記録映画・文化映画の専門雑誌『文化映画研究』（1938-1940）『文化映画』（キネマ週報社、1938-1940）『文化映画』

（映画日本社、1941-1943）、一般映画雑誌の『日本映画』（1936-1945）『映画旬報』（1941-1943）を対象に、記録映画・文化映画関係記事のデータベース化に向けての作業をおこなった。今回の作業では、単に目次のみのデータ化（記事名と執筆者名）にとどまらず、内容を読み込んだ上で、記事の中で言及されている人名や映画作品名、製作会社や団体名、または主題などでも検索できるような画期的なデータベースの完成をめざした。しかし、関係記事の量が予想以上で、記事を読み込むのに膨大な時間をとられ、現段階で作業は終了していない。だが、完成すれば、のちの映画研究に多大な寄与をする画期的なものになるであろうことは疑いない。

(3) 文化映画の中軸ジャンルである科学映画を興隆させ、科学映画を広く社会に受け入れさせたのは、同時代の科学性重視の姿勢であった。そしてここで表出した科学性追求の精神は、以降も姿形を変えながらも、映画論壇における記録映画をめぐるさまざまな議論の根底に流れるひとつの潮流となり、戦後もそれは引き継がれていく。すなわち、科学映画における科学精神の解明は、言論界さらに社会における記録映画の受容の解明へと至ることになる。今回の研究調査では、戦後記録映画論争の論客であった佐々木基一や野田真吉に焦点をあて、その軌跡をあきらかにした。

公募研究 2012 3

吉田文庫所蔵調査と吉田東伍の学問の体系的研究

研究代表者：江口文恵（法政大学能楽研究所）

研究分担者：竹本幹夫（早稲田大学文学学術院教授、早稲田大学演劇博物館館長）青柳有利子（日本学術振興会特別研究員）、中尾薫（大阪大学大学院文学研究科専任講師）

吉田文庫での所蔵資料調査のため、8月に研究代表者の江口、分担者の竹本、協力者の近藤弘子の3名で新潟に出張した。今回は、貴重書や軸物類を中心に調査を行った。かねてから文庫側から要請のあった、新出資料の好太王碑文拓本の調査を遂行するため、朝鮮史の専門家である李成市早稲田大学文学学術院教授、武田幸男東京大学名誉教授、橋本繁早稲田大学非常勤講師も同行した。三氏の協力のもとに調査を行い、拓本全4面の撮影を完了させた。調査の結果、文庫所蔵の拓本は、東伍が存命中の大正年間に購入したものであることは間違いなく、恐らく東伍が大正四年頃に朝鮮に渡ったときに購入したものと考えられる。今年お茶の水女子大学で発見、公開された同類の拓本（昭和2年頃のものか）よりも古い時期のものであることは確実である。吉田文庫所蔵の拓本については、いずれ李教授より詳しい報告がな

される予定である。そのほか、東伍が収集した朝鮮古典籍および関連資料の調査をお願いした。

日本の古典籍では奈良絵本や中世の連歌師心敬の自筆本などの調査・撮影を行う。奈良絵本『あまやどり』『しゅてんどうじ』『あざち』の三種は、絵巻や説話と能の関連を研究している近藤が現在調査中である。特に『しゅてんどうじ』については、東伍没後に発表された小論「酒顛童子物語」（『能楽新報』236号、大正7年5月発行）と関連する可能性もあり、東伍の能楽研究との関わりが期待される。

ほか、吉田東伍が雑誌などに書いた原稿の切り抜きの調査では、出典や年月が不明なものがあつたため、現地調査終了後、江口が法政大学能楽研究所などで記事の出所の照合を行い、その8割が判明した。

公募研究
2012
4

文明戯の多角的研究

研究代表者：瀬戸宏（摂南大学外国語学部教授）

研究分担者：平林宣和（早稲田大学政治経済学術院准教授）、飯塚容（中央大学文学部教授）

・7月14日（土）、近年発表された文明戯に関する重要な著作である王鳳霞『文明戯考論』（広東高等教育出版社 2011. 7）の合評会をおこなった。分担は次の通りである。

緒論・第1・2章 平林宣和、第3・4章 陳凌虹、第5・6章 鈴木直子、第7・8章 瀬戸宏、第9・10章 飯塚容。

合評参加者はいずれも詳細なレジメを用意し、さまざまな角度から『文明戯考論』の持つ意義と問題点を指摘した。文明戯の上演関係についての多くの新事実を新聞などを用いて発掘した王鳳霞氏の努力が高く評価されると同時に、王氏が提出した文明戯の概念規定やそれと本書全体の構成の関係などに、批判的なものも含めて多くの意見が出され、活発な討論が繰り広げられた。

・11月10日（土）新潮演劇と新劇の発生学術研究会（第2回清末民初新潮演劇学術研究会が名称変更）、事前研究会をおこなった。発表者の報告タイトルは次の通りである。

飯塚 容 文明戯劇本的六種類型

鈴木直子 洪深『趙閨王』の新劇としての意義

瀬戸 宏 再論春柳社在中国戲劇史上的位置—兼談中国話劇

開端是否春柳社

平林宣和 古装新戯と京劇国粹化—1910年代京劇之新・旧・古

陳凌虹 “新劇俱樂部”史料拾遺

李苑儒 張維賢と台湾新劇—レパトリーの考証と分析

各自の論文内容を報告し研究グループの相互理解を深めるとともに、11月30日の論文締切に向けて論文内容を練り上げる一助とするのが、この研究会の目的であった。報告内容はいずれも文明戯を直接扱うか、それと密接な関連を持つもので、いずれも研究課題「文明戯の多角的研究」にふさわしい報告であった。年末のシンポジウムのよい予備討議になり、たいへん有意義であった。

・12月21日—23日開催の新潮演劇と新劇の発生学術研究会に参加。発表者は11月10日事前研究会発表者6名のほか、魏名婕「以多種視覚重新探討《黑奴籲天錄》」、大江千晶「穆儒丐思想軌迹之一端—以旧劇改革为中心」である。

公募研究
2012
5

『映画以後』の幻灯史に関する基礎的研究

研究代表者：鷺谷 花（早稲田大学文学学術院非常勤講師）

研究分担者：岡田秀則（東京国立近代美術館フィルムセンター）、紙屋牧子（早稲田大学演劇博物館招聘研究員）、鳥羽耕史（早稲田大学文学学術院）、安井喜雄（神戸映画資料館館長）、土居安子（財団法人大阪国際児童文学館）、吉原ゆかり（筑波大学人文社会科学部研究科）、中野正昭（早稲田大学演劇博物館招聘研究員）、Robert Tierney（イリノイ大学東アジア研究科）

前年度から所蔵状況調査と目録作成に取り組んできた神戸映画資料館及び大阪国際児童文学館の幻灯関連資料コレクションについては、目録作成を完了、大阪国際児童文学館の所蔵資料に関しては、早稲田大学演劇博物館への寄贈を行うべく、全フィルムのエッジコード及び状態調査、仕分け作業を完了した。

また、存命の当事者に対する聞き取り調査を進め、8月には北海道・室蘭市にて、1954年の日鋼室蘭争議時の元労組教宣部長広田義治氏に、争議記録幻灯『日鋼室蘭首切反対斗争記録 嵐ふきすさぶとも』全2巻の製作及び運用に関するインタビューを行い、手書きの台本、配給会社発行の『幻燈ニュース』など、貴重な資料のご提供をいただいた。10月には、幻灯フィルム・台本数十点を含む新日本室素（現チッソ）労働組合旧蔵資料を所蔵している熊本学園大学・水俣学研究センターを訪問、元新日室第一労組委員長の山下善寛氏に、1960年代当時の幻灯の運用状況についてうかがったほか、同センターに、合化労連製作『みんなで守ろう 水俣のたたかい』（1962）、加古里子作画構成・東大セツルメント川崎こども会製作『自転車にのってったお父ちゃん』（1956）

など、所在不明だった貴重な幻灯フィルム及び台本が所蔵されていることを確認した。

8月26日に、神戸映画資料館にて、研究代表者・鷺谷花による戦後日本の社会運動における幻灯の利用についてのレクチャーと併せて、加古里子構成・東大セツルメント川崎こども会製作『ぼくのかあちゃん』及び、『嵐ふきすさぶとも』全2巻の幻灯機を用いた上映を行った。『嵐ふきすさぶとも』は、オリジナル台本の指示に従い、労働歌のバックコーラス付きの上映を行った。

版権の帰属を確認し、使用許諾を得た上で、山形県の実在の農家をモデルとした農村生活改善に関する教育幻灯『嫁の座』のニュープリントを作成した。9月16日、『嫁の座』、『ぼくのかあちゃん』ほか3本の神戸映画資料館・大阪国際児童文学館所蔵の幻灯を、「ドキュメンタリー・ドリーム・ショー 2012」の公式プログラム「幻灯・光の紙芝居」として、早稲田大学大隈タワー地下講堂にて、講談師・宝井琴柑氏の語りにより上映し、当日は満員の盛況となった。

公募研究
2012
6

寺山修司の創作——一次資料から明らかにする活動実態——

研究代表者：岡室美奈子（早稲田大学文学学術院教授）

研究分担者：梅山いつき（日本学術振興会特別研究員）

現在演劇博物館が所蔵する寺山関連資料は約60点あり、そのほとんどがチラシやパンフレットといった配役等公演内容がほぼ確定した後に制作されたものである。1960年代の他の小劇場演劇と同様、演劇実験室・天井桟敷も横尾忠則や栗津潔を美術担当として招き、手の込んだチラシ・ポスターを制作していた。よってそうした宣伝材料からは寺山をはじめとする演劇実験室・天井桟敷のねらいや社会に対しどのようなインパクトを与えようとしたかといった集団としての指針が視覚化されている。だが、どのような過程を経て上演に至ったかを知るためにはこうした資料だけでは情報不足である。そこで本研究では上演・上映回数の多かった作品を中心に、海外で収蔵されている関連資料の調査を行っ

た。演劇実験室・天井桟敷はいち早く海外公演を勢力的に行った集団である。『人力飛行機ソロモン』や、『毛皮のマリー』などは上演国でオーディションを行い、現地の人びとを巻き込む形で上演された。それ以外の作品においても寺山は集団による共同制作を重んじており、即興性を重視したと言われており、そのことは寺山の演劇論でも明言されている。しかし実際には入念な準備と精緻な構成の上にそうした共同作業が存在していたことが今回の調査で明らかになった。なお調査では各資料の詳細を記した一覧を作成すると共に、資料を撮影した。残りの研究期間をつかって資料の読み込みを行う予定である。

公募研究
2012
7

河竹黙阿弥の作品研究

研究代表者：岩井眞實（福岡女学院大学教授）

研究分担者：今岡謙太郎（武蔵野美術大学教授）、吉田弥生（文京学院大学准教授）、寺田志麻（早稲田大学演劇博物館招聘研究員）、金子健（文部科学省文化庁）、埋忠美沙（日本学術振興会特別研究員PD）

黙阿弥研究会は2010年度から継続し、毎月一度研究会を開催している。今年度は、主に2つの研究をおこなった。第一に、昨年に引き続き作品研究と台本および正本写の翻刻。第二に、黙阿弥生誕200年となる2016年の刊行を目指し、『黙阿弥図録』と『黙阿弥論文集』の編集。それぞれの詳細は以下の通り。

- ①作品研究と台本および正本写の翻刻。未翻刻台本一作（『小幡怪異雨古沼』）および正本写3作（『小幡怪異雨古沼』『怪談木幡小平次』『糸時雨越路一颯』）の翻刻をおこなった。3月末日に日本芸術文化振興会（国立劇場）より、『未翻刻戯曲集』19巻、『正本写合巻集』9・10巻として、計3冊出版予定。このうち『糸時雨越路一颯』は台本が現存せずこれまで詳細不明であったが、正本写の翻刻によってその筋立てが明らかになった。結果、三遊亭円朝作（一部で黙阿弥作の可能性も指摘されていた）の落語『鰻沢』との影響がうかがえる部分が確認でき、『鰻沢』の作者をめぐる研究（『鰻沢』＝黙阿弥作）が大きく進展した。
- ②黙阿弥生誕200年記念『図録』と『論文集』の編集。これまで

の黙阿弥の刊行物として、図録は演劇博物館展示の図録『没後百年河竹黙阿弥』（1993年）があるが約20年前の成果で、論文集は未だ刊行されていない状況である。そこで「黙阿弥研究会」の成果を反映させた『図録』と『論文集』の出版を目指し、計4回編集会議をおこなった。2冊とも、黙阿弥生誕200年にあたる2016年の出版を目指している。現在までに、『図録』の目次と各章の執筆者を決定。目次は昨年度、研究会で執筆を担当した国立劇場webサイト「文化デジタルライブラリー 黙阿弥」(HP: <http://www2.ntj.jac.go.jp/dglib/contents/learn/>) の内容を基盤としつつ、いくつか新たな項目を追加してより充実した内容を目指す（追加項目の一例：台本翻刻と絵画資料について）。掲載図版は、『没後百年河竹黙阿弥』に重要資料が網羅的に掲載されているため、未紹介資料を多数収録することを目指して関連資料を新たに多数所蔵した国立劇場などにおいて現在資料調査中である。

公募研究
2012
8

近代文楽と写真・美術をめぐる基礎的研究

研究代表者：児玉竜一（早稲田大学文学学術院教授）

研究分担者：内山美樹子（早稲田大学文学部名誉教授）、湊田裕介（国立文楽劇場企画制作課企画制作係）、飯島満（東京文化財研究所無形遺産部）、原田真澄（早稲田大学大学院博士課程）、大西秀紀（京都市立芸術大学日本伝統音楽研究センター非常勤講師）

演劇博物館で購入した文楽小道具の絵（斎藤清二郎自筆）については、全点について、画中文字の翻刻をおこなった。さらに描かれた演目を考証し、描かれた年代による事情等について検討を加えた。さらに、同年代に描かれた同種の絵、すなわち宮尾しげをによる文楽小道具の挿絵との比較検討をおこない、斎藤清二郎が独自に取材したと考えられる事例と、両者に共通する取材源が存在する事例とを検証した。

以上のような調査・研究を経て、同資料は、戦前期（おそらく1930～40年代）の文楽小道具の詳細を、彩色付き、採寸付きで記録した希少な資料であることを確認することができた。文楽の舞台裏に關しての記録は、残存がきわめて少なく、また小道具については、人形遣いが片手間のような形で製作や補修を兼ねたため、専属の職掌による記録が残らないことが知られていたが、そうした記録の欠如を補うものとして、非常にユニークな資料的価値を有するものと考えられる。

このような成果に鑑み、この資料を広く公開することには意義

があると考え、演劇博物館のホームページ上で何らかの資料公開を検討したいと企図している。ネット上にアップするための資料整備は、ほぼ終えたものと考えている。

斎藤清二郎画による文楽絵はがきについては、約80点を確認し、包み紙ともども、画像をデータ化した。四つ橋文楽座における名物として知られている同絵はがきであるが、全容を検討した例は未だない。本研究でも全容を知るには至らなかったが、舞台面を描く角度など、斎藤清二郎の画法の特色について、舞台写真を参照したと思われる事例など、興味深い検討結果を得ることができた。また、同外題の舞台面を、同じような、しかし異なる、描き方をした事例もいくつかあり、年代考証がきわめて難しいことも確認できた。

演劇博物館所蔵の文楽写真は、年代考証ができていないため、館内閲覧のデータ画面上でも、資料的価値を減じている。このための年代考証を順次おこない、その結果を、演劇博物館のデータに反映させていきたい。

公募研究
2012
9

19世紀末から20世紀前半のフランスにおける「絵描きの仕事」と舞台芸術界の美学的関連ならびに人的交流をめぐる研究

研究代表者：間瀬幸江（早稲田大学文学学術院助教）

研究分担者：藤井慎太郎（早稲田大学文学学術院教授）、セシル・クータン（フランス国立図書館演劇部門主任学芸員）

演出家という職能が確立された19世紀末から20世紀末までのフランス演劇界を、演出家という作家性ある演劇人を通してではなく、その指示の下で動いていた《絵描き》にあえて着目して見渡すことで、既存の枠組みでは取りこぼされてきたさまざまな研究のフィールドを開き得ることが見えてきた。

例えば、20世紀初頭のフランス美術を刷新したナビ派の画家達たちは、雑誌、パンフレット、挿絵、上演プログラムなど、手がけた仕事が多岐にわたっている。彼らが中心に関わり発展を遂げた象徴主義演劇は、この多様性を基盤として語られることが不可欠である。したがって、ナビ派のなかでも劇界とつながりを持たなかった画家たちの存在も視野に収めることによって、かえって、ナビ派という基盤を介して劇界をめぐる人的交流の回路の掘り起こしが可能になる。また、ロシア構成主義作家たちの仕事を、劇界のみに絞らないで見渡すことにおいても同じようなことが言える。以上のことが、研究協力者であるクリスティヌ・アモン名誉教授による研究会によって報告された。

また、フランス国立図書館演劇部門にて舞台美術関連の博物館資料の管理に関わってきた、本研究の研究分担者セシル・クータンから、第一次世界大戦においては、最前線で敵を撓乱するため

に、《絵描き》がカモフラージュのさまざまな手法を用いて活躍したとの報告がなされた。なかでもとりわけ、舞台美術をすでに手がけていた者たちが重要な役割を果たし、さらには、戦場で磨かれたこうした技術が、戦後のフランス演劇の舞台装置の革新にも寄与したことが、やはりクータンから報告された。肉弾戦となった第一次世界大戦の惨禍の記憶が、複合芸術としての演劇の飛躍的な発展にとって大きな意味を持つことはすでに様々に指摘されてきたが、戦地で実際に用いられた技法の舞台美術へのダイレクトな連関が明らかになったのは、演劇学の枠組みでは研究の俎上につかない《絵描き》たちの動向にフォーカスを絞ったためである。

演劇と違って絵画は、作者は原則的に1人で、ときに無名である。挿絵本関連の既存の総記資料が、もっとも網羅的に《絵描き》の仕事を把握できるとはいえ、そのデータを、雑誌やプログラムで実際に用いられたイラストの作者と付き合わせる作業は容易ではなかった。しかし、だからこそなおさらに、今後は《絵描き》1人ひとりに焦点をあてた研究への発展が求められようし、そうした個別の基盤研究が束になることで、新たな総記資料作成のフィールドが開かれうると結論づけたい。

公募研究 2012 10

佐野碩と世界演劇

研究代表者：上田洋子（早稲田大学）

研究分担者：永田靖（大阪大学文学研究科教授）、内田健介（早稲田大学演劇博物館招聘研究員）、斎藤慶子（早稲田大学文学研究科博士後期課程）

公募研究「佐野碩と世界演劇」では研究会の開催を通し、日本から一人の演劇人としてアメリカ、ドイツ、ロシア、メキシコ、コロンビアと世界を渡り歩いた佐野の足跡を、佐野碩研究者や佐野碩にゆかりの深い人物の研究者たちによって掘り下げていく活動を行った。

まず、第1回研究会では岡村春彦氏執筆による『自由人佐野碩の生涯』の編集に携わった菅孝之氏より、日本で佐野が演劇活動を始めた時代背景とその影響を踏まえた解説と、現代において佐野碩の足跡を追う意義についてのお話をいただいた。

そして、佐野碩がソ連滞在中に演劇を学んだメイエルホルドの研究者であり、現在ロシア演劇アカデミーに留学中の伊藤愉氏には、佐野碩がソ連に渡ってから活動を、ロシアのアーカイヴから発見した資料をもとに、モルト（国際労働演劇同盟）やメイエルホルド劇場研究工房における活動について発表いただいた。

そして、スペイン語圏の演劇の専門家であり、佐野碩のメキシコやコロンビアでの活動についてこれまで研究をされてきた吉川恵美子氏に、佐野がメキシコに渡ってから演劇活動について、現地での関係者から聞いた話や資料を交えて解説していただいた。

第2回研究会では、ドイツの演出家ピスカートアの専門家であ

る萩原健氏により、佐野とピスカートアの関係を中心に、佐野がドイツに滞在中の活動だけではなく、1937年からのフランスやチェコ、38年からのアメリカ、1939年から晩年まで過ごしたメキシコと佐野の演劇活動において切り離すことのできないピスカートアとの関係性について発表をしていただいた。

続いて佐野碩の伝記『ビバ！エル・テアトロ！炎の演出家佐野碩の生涯』の著者であり、近代日本演劇の研究者である藤田富士男氏に、佐野碩の研究を進めていく中で手に入れた貴重な資料の紹介をしていただきながら、日本での佐野の活動や、彼の生い立ち、演劇活動の出発点など、新しく判明した点などについて発表していただいた。

このように2度の研究会を通じ、日本、アメリカ、ドイツ、ロシア、メキシコ、コロンビアといった様々な場所で佐野碩の活動を様々な研究者によって総合的に見ていき、それぞれの研究者が抱いていた佐野に関する疑問点などを共有し、発表後の討論会で議論することができたことは大きな成果であった。

また、3月1日（金）～3月3日（日）の3日間、早稲田大学にてシンポジウム「佐野碩、演劇で世界に勝負を挑む！—日本からロシア・欧州へ、そして北米・南米へ—」を開催予定である。

平成25（2013）年度の活動予定

※公募研究については現在審査中です。

テーマ研究

- ① 日本における中国古典演劇の受容と研究
岡崎由美（早稲田大学文学学術院／教授）
- ② 台本による歌舞伎作品復元の調査研究
古井戸秀夫（東京大学大学院人文社会系研究科／教授）
- ③ 舞台芸術 創造とその環境 日本／世界
藤井慎太郎（早稲田大学文学学術院／教授）
- ④ 演劇博物館所蔵映画フィルムの調査、目録整備と保存活用
入江良郎（国立近代美術館フィルムセンター事業推進室／主任研究員）
- ⑤ 日本映画、その史的社会的諸相の研究
古賀太（日本大学芸術学部／教授）
- ⑥ 演劇研究基盤整備：舞台芸術文献の翻訳と公開
秋葉裕一（早稲田大学理工学術院／教授）
- ⑦ 能・昆劇の比較研究—日中伝統演劇の現在と未来
佐藤信（座・高円寺／芸術監督）
- ⑧ 伎楽面の総合的研究及び復元模刻制作
数内佐斗司（東京藝術大学大学院／教授）
- ⑨ 寺山修司の創作—一次資料から明らかにする活動実態—
岡室美奈子（早稲田大学文学学術院／教授）

○お知らせ 早稲田大学演劇映像学連携研究拠点は、来年度、平成25（2013）年度が事業の最終年度となります。

演劇映像学連携研究拠点
ニューズレター
3号

2013年2月

編集：宮信明、木村智哉
発行者：文部科学省「特色ある共同拠点の整備の推進事業」による早稲田大学演劇映像学連携研究拠点
拠点リーダー 竹本幹夫
早稲田大学演劇映像学連携研究拠点
〒169-8050 東京都新宿区西早稲田1-6-1 早稲田大学早稲田キャンパス6号館221教室
TEL：03-5286-8515 URL：http://kyodo.enpaku.waseda.ac.jp/